

川 柳  
の 証 物

NO.VIII VOL.XIII

川柳の証物

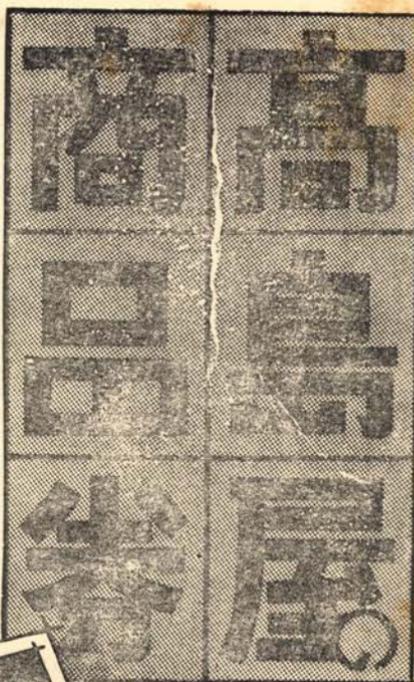
中元の御贈答には何より重寶な…

各地高島屋共通

 南海高島屋  
六版・なしば  
 長崎高島屋  
大阪・長崎橋  
 和歌山高島屋  
一ノ橋・公園前  
 岸田高島屋  
岸田・橋町

 京都高島屋  
京都・烏丸  
 東京高島屋  
東京・日本橋

其他各地高島屋10匁20匁  
 ストアにも共通で御便利  
 (商品券の御用命は右各店の外各地  
 高島屋御用承り所でも承ります)



くよ裁體上以円五  
すまし致進調御



南海店・一階

長崎店・一階



阪大  
**高島屋**  
 店海南・店堀長

# 川柳雜誌

第三十卷 第八號

散策

(石曾根民郎君)



# 川柳雜誌八月號目次

文苑

川柳名句評釋

麻生路郎(四)

川柳と松浦靜山侯(三)

石崎柳石(六)

漢談漫語

高尾亮雄(一六)

武玉川二篇研究(二七)

梅本秋の屋  
森東魚(三三)  
蛭子省二

ほからか二題

天

井

姫田夕鐘(四八)

街に住めば

高橋かほる(四八)

「六厘坊十句」の再検討

木村半文錢(三六)

表紙・路郎筆



# 次目號月八 誌雜柳川

サンパツ (漫筆).....

麻生路郎 畫 (二七)

三越の休憩室より.....

蛙 (四八)

僕の髭.....

西田艸樂 (一九)

お岩さんと印税.....

不朽洞主人 (四五)

眼から鼻へ.....

不死鳥 (一八)

職業川柳人宣言.....

麻生路郎 (四六)

創作

近作柳樽.....

(一八)

日本名所名物川柳 (四國の卷).....

前田五健選並書 (三三)

一路集

金魚湯上り

西村明珠選 (四四)  
高橋かほる選 (四四)

各地柳壇.....

(三三)

柳界展望.....

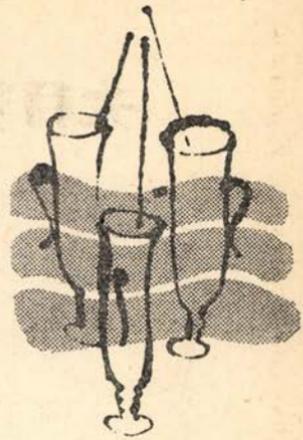
(四〇) 川柳家戸籍調..... 緑雨 (四〇)

川・雑・案・内.....

(五二) 編輯 縦横..... 路郎 (四九)

川柳人協会にお入り下さい.....

川柳人協会 (五三)



# 川柳名句評釋

(1)

麻生路郎

子に甘く妻にも甘く子守する

遠見路

よきパパであり、よきハズであらんとするには常にこの覺悟が要る。しかしです、あまり見つともよくはない。

電球を代へに四男と三男と

いさむ

一讀、子澤山の家が思はれる。自動車に心を奪はれながら黄昏の街を裏切るいとけない兄弟の姿が眼に見えてうれしい句である。

樂隊の太鼓はいつち馬鹿に見え

利生

伴奏樂器の中でも、太鼓がいつちのんきさうだ。大方からだが隠れてしまう大きな太鼓をマの抜けたやうに時々打ち鳴らしてゐるさまは見つともいゝ圖ではない。

一人酔うて三人乗りおくれ

通夫

三人の一人が悪酔ひをすると「君もう大丈夫かい」と肩を貸してゐる悪友の一人が聞く。「スツカリ出した方がいゝぜ」と他の一人がいふ。

ミス／＼乗れる郊外電車の後姿を見送りながらも、矢張り酒は忘れられないのである。

あの方こそ思ふお人の疑獄沙汰

沐天

今の世は眞逆かと思ふ人さへ、引張られるやうに出來てゐるのである。正直と阿呆と同意語であつたりするのである。おそろしいことである。

敢て冒險をなすにあらず硝子拭き

大門

八階の窓から半身を乗り出し、見てゐる人をハラ／＼させる硝子拭きも生きんがためである。食はんがためである

呑むだけが能ですご妻こきおろし

鐵心

ホントにうちの人は呑むしか能がないんですの。逆も朝寝坊だし、夜更しやだし、うちのことなんか、ちつとも構つては呉れないだしと聽いてゐれば果てしない。そんなにイヤな亭主だつたら別れたらよかりさうなものだが。

市電代返すにもめる女連

菜

「アラ妾が出して置くわ」と市電の切符を出されて、その儘でおさまらぬのが女氣である。「コレで取つて頂戴」と五〇錢玉を出すと、片方でも、つむじを曲げて「そんなもの要らないわ」と兩手で押し返へす女性氣質の一風景。

狀袋のように平たくなつて死に

惣吉

呼吸のある間こそ、人間も人間らしいが、浮世の苦勞にさいなまれた人がペチャンコになつて横はつてる姿は憐れにもみじめなものである。比喩法の上乗の句だ。

ごのバスの券も用意の社交術

喜由

頼まれもせぬのに「もう切りました」とバスの券を無闇に出したがる男がある。ソレを社交術と心得てゐるのであるから面白い。

そんな男に限ぎつて料理屋の拂ひには尻込みする。ソコまでしては社交上失禮だと心得てゐるのであらう。

店先の紙屑主人足で寄せ

正穂

主人といふものは兎角こまかいとこへ氣がつく。いつそ叱られる方がましだと思ひながら、主人が足で寄せてゐる紙屑をうらめしさうに眺めてゐる店員の心境までがありがたくと讀める。

大部屋のまゝで婚期はさうに過ぎ

陽出男

好きこそ物の上手なれとばかりも行かない。好きで飛び込んだ女優生活ではあるが、既に婚期も過ぎてゐるのに大部屋組の一人とは餘所事ながら氣の毒だ。

女事務焼増代を出すと言ひ

山川兒

「ホントによく撮れたわ」とは女事務員の心のうちの言葉である。その心が言葉となつてあらはれたのが「焼増代を出すから、もう一枚焼いて頂戴よ」なのである。頼まれた男、ニヤリ。

婦人科へ來ると亭主はかここまり

松花

婦人科へついて來る亭主ほど氣の利かぬものはない。隅つこで小さくかここまつてゐるより外に、てだてがないのである。弱き者よ汝の名は男なりである。

盛装へ何をひがむか撒水車

淺 女

美しく着飾つた人の方へワザと撒水車が近寄つて行く。フエルト草履が逃げてゆくのを尻目にかけて、バラバラと水を撒く。俗世に拗ねたひがみ心と見られても仕方がありません。

貯金帳筆筒の奥の奥へ入れ

錦 浪

もう五十錢で拾圓になる。もう十三圓で百圓になる。貯金帳にはさうした人知れぬ楽しみがある。それだけに、貯金帳ばかしは人に見られたくないので筆筒の奥の奥は愚か疊の下に隠したりする。

夏の夜の書齋スタンドだけ灯り

千 壽 郎

暑いので、讀書どころではない。ぶらりと涼みに出かけて了ふ。あとにはスタンドの灯だけが靜に夏の夜のしじまをまもつてゐる。

金言の通りにやると蹴落さる

五 健

正直の頭に神宿るといふ金言がある。なるほど、それに

違ひはないが、莫迦正直にそれを守つてゐると、いつの間にか、同僚に蹴落されてゐるのも今の世の中である。金言も時には死ぬことを知らねばならない。路郎の句に「正直がなんのたしにもならず死に」といふのもある。

簾編み道場程の音を立て

東 魚

パチン パチンと簾を編んでゐる音を聞いてゐると、それが道場そつくりだと、感じたのである。連想の面白味である。

來年はきつちりご合ふ子供服

荷 十

でぶくの服を着せられた子どもをよく見かけるが、こどもなんて直ぐ大きくなるので、來年になつたらキツチリ合ふよと平氣で着せてゐるのを穿つたのである。

選舉違反あの料理屋の灯を思ひ

路 郎

うつかり御馳走になつて、清き一票が汚き一票になつてしまつた。あの料理屋の灯が今更うらめしい。

底のない桶を鶏ぬけてゆき

雞 牛 子

のんびりとした叙景川柳である。底のない桶の中を抜け、てゆく姿に、作者の心の平和さが感じられる。

# 洋家具部腰をかけたが買もせず

柳 秀

こゝはデパートの洋家具部。アラ、ちよつと、こんな  
いゝわね。と軟かいクツシヨンに腰を下ろしたが、懐と相  
談すると迎もく買へつこのない札がブラ下つてゐる。  
二人は若い。

# 色戀をささすに刻み二三ぶく

久 流 美

その昔、自分にもさうした経験があらうのに、徐ろに刻  
みを二三ぶく喫うて、サテと鹿爪らしい顔になり、色戀を  
さとす老人の面憎い態度がよく描かれてゐる。老巧の作。

# 挨拶のうるさき人が向ふから

丹 路

一ト月前に貰つた浅草海苔の禮から、先日のお會へ出られ  
なかつたお詫び、それが濟むと「お祖母さんが亡くなられ  
たさうでしたが、一寸旅行をして居りましたので失禮いた  
しました。さぞお力落しでせう。それは幾つ何十でお亡く  
なりになつても親身の方は別ですから」と長つたらしい悔  
みまで、忙しい世の中にこれは又對手構はず述べ立てる人  
でもあらうか。こちらが書生式の人であればあるほど、  
うるさがつてソツと道を外づしてしまうのも無理はない。

# 大食ひの役に立つ日の夏祭

新 水

こんなに澤山御馳走をして腐りやしないかと案じてかゝ  
るのを尻目にかけて健啖家の顔にほゝえまされる。

# もう隣まで寄附帳の聲が來た

牧 八

町内の顔の紳士が四五人、例によつて寄附乞ひに押し歩  
く。ソレ學校の改築だ、ヤレ防空の演習だと財布の口があ  
き通しだ。この句「聲が來た」の下五がいのち。

# 手についた靴墨これも生活か

久 米 雄

あすの出勤のためにも、將來への希望のためにも靴の先  
を光らすだけの用意は要る。獨り者の小さな溜息か。

# 人絹のやうな男が跳梁し

没 食 子

役者のイミテーションのやうな、のつべりとした男前で  
ベンチヤラも一人前、機會があれば漬職の末席でも汚しさ  
うな男が兎解世間ではのさばつてゐる。それを作者は慨嘆  
したのである。

近作柳樽

善人の小さゝがお辭儀ばかりする

神戸 喜多 春秋

金持の恐怖が寄附を申出で

同

御近所へ又産む腹を突出して

同

トードダンス全く錐のやうに立ち

同

夫たるものどれを着るのか聞と着る

同

夜の夢ひるの夢かくて老ひ果つか

大阪

山木 舟路

總領のその氣になれば馬鹿でなし

同

怒とはさびしきものをもつものよ

同

赤い腰紐病妻の立つた腰

同

乞食のころはわからないで君

同

自轉車で急ぐ坊主の稼ぎやう

同

わたくしもぶろれたりあと藝者言ふ

同

それづくに相手があつて二人づゝ

同

罪の人らかく従順に歩を運ぶ

同

お婆アさんも婦人で國防婦人會

同

護送する巡查は若し我ほどに

同



不可思議な表情よ苦惱もなきごとし

同

雨をお聴き罪が洗はれてゐます

同

遺言はなにもなかつた借りだらけ

神戸 西村 明珠

酔ふたすでもしなければはしやがす

同

御先祖へすまぬ女を連れ歩るき

同

もう少し遊んで来いと大掃除

同

一つよりいらぬ履歴書夜が更ける

同

寝る時間さへ惜しみなく賄賂か

同

放送は接戦明日は試験なり

同

時間表を合はす子が剣ぐカレンダー

同

どんな風に誰が寝たのか宿蒲團

兵庫 長崎 柳秀

人間の呉れる名譽は高が知れ

同

文明の影に淋しい人力車

同

遮断機を運の悪さは降される

同

つまみとる形子供の鼻を拭き

同

あれで目がさめば馬券も知れた損

同

突發の後で學者の理窟めき

同

夕刊を買ふてやりたい風が吹き

同

その謎を解かずに手など 黜らせる

大阪 西田 紳樂

憎み得ぬ女にのどを刺されかけ

同

清い身でどこまでゆけるか恩があり

同

疑つて愛の動作が募るなり

同

名の賣れた人と小さく湯に浸り

同

片笑靨何思ひけん晝日中

同

寝ころんでなんでも枕にしたいくせ

同

本當の心淋しい化粧部屋

大阪 大西 八歩

涙ぐむ姿へ意見ちとあはて

同

老の身のこうも並んだ人力車

同

切出せば聲も姿も變つて來

同

贅澤な戀六甲を降りてくる

同

満ち足りた顔はハレムの月の下

同

さて女知らない顔で来いと云ふ

同

先輩の犠牲へ小癩なり非難

松山 酒井 大樓

酔ふ迄はいゝが以上は疑獄とか

同



- |                 |    |                       |    |    |    |
|-----------------|----|-----------------------|----|----|----|
| 天人を待たず旅行は雨となり   | 同  | 天職として月給は行詰り           | 大阪 | 橋本 | 緑雨 |
| 失職の氣安さおべつかも云はず  | 同  | 六疊の廣さに團扇一つ落ち          |    |    |    |
| 憂き事の數に母と妻の愚痴    | 同  | 終電に繪日傘一つ倒れかけ          |    |    |    |
| ゲーム取り玉を轉ばすアクセント | 同  | 打水へ隣の人が戻るなり           |    |    |    |
| 再縁離縁又落ちて行く女     | 同  | 正直にコレと別れたことを云ひ        |    |    |    |
| 風流のいつかは足袋の汚れを見  | 大阪 | さびしさのあまりにながき葱坊主       | 兵庫 | 水谷 | 鮎美 |
| アカンヤの並木月給取と知る   | 同  | 藤の花妓に似たる下りよう          |    |    |    |
| 愛の巢の故郷は遠し夏みかん   | 同  | 寝ころべばわが子の指が鼻へくる       |    |    |    |
| 罪の子を宿し債權者の恐怖    | 同  | 天野ト居氏令聞の靈前にささぐ(五月十九日) |    |    |    |
| お手酌にまかせて妻は縫ひはじめ | 同  | あゝ灯にうごかねば夢と消ゆるかも      |    |    |    |
| さびしさは又次の間の匂ひする  | 同  | 釋尼妙雲は永遠の愛となる          |    |    |    |
| 湯上りに貧しい事を忘れたり   | 大阪 | 婆アさんの友達が来る夏祭          | 大阪 | 須崎 | 豆秋 |
| 小役人の妻となり語氣荒し    | 同  | 八乙女は目玉で右と左を見          |    |    |    |
| 小説を見てる受付返事せず    | 同  | 汗たらりたらり太鼓の男性美         |    |    |    |
| 値切る事に馴れて大阪臭い息   | 同  | アネ、イモトおんなじ色の雨合羽       |    |    |    |
| 自動車で縁を切つた風の味    | 同  | 紅氏を弔ふ                 |    |    |    |
| 突堤と船と子の顔親の顔     | 同  | さつき雨冥途は晴れて居れよかし       |    |    |    |



下積みにある氣安さの爪が伸び神戸濱田久米雄

悪口へそや〜と巻き込まれ同

引越の残つてゐたは妻が提げ同

歸省まだ麥の伸びたに氣がつかず同

寶船波まで黄金色にされ同

帯解いた音隣室へ氣が疲れ兵庫廣原都會人

病床に居てさへ媚びるのも女同

新婚へ車中の視線無禮なり同

社交室ザマス言葉に隙もなし同

逢ひに来てその戀情をひたかくし同

子の背を越して豌豆の花咲けり鳥根區尼綠之助

桑畑青々と農家の幸を祈るなり同

S 兄の再婚

餘儀なきことそこに希望が渦巻かむ同

菊朝顔夏から秋のプログラム同

田舎にて

のんびりと半期節季がせまるなり大阪姫田夕鐘

劍山登山

二千米せめて世間を見おろさん同

金のかたに觀音像が包まれる同

汗ばたり〜プロレタリアのもの同

醜さも良さも煙にしてしまひ廣島縣松井可笑

體臭に壓倒された目をそらし同

それとなく落目の今日を子は覺り同

ヌーボの社長こまかいとこがあり同

應按間こゝで待たせて氣を挫き大阪市場没食子

裏面工作はお顔に似ず上手同

我が子 (二首)

口へ早や拳を運ぶ智恵がつき同

親馬鹿の證據今から子の自慢同

吾は海の子泥を立て泥を立て大阪麻生 葎乃

訓導の餘戲ワンオールトウオール同

ゑさを曳く努力の蟻を見逃しぬ同

踊りたし海月と俺と浮き袋金澤安川久流美



八月の海岸線の窓の首

同

苦しんだあとへは見えぬデスマスク

大版

青木 史呂

死にたくもなし病床にペンを持

同

薬局で聲を落したカルモチン

同

朝鮮人キセルくわへて轆かれかけ

大版

妹尾 變人

文鳥の夫婦みたいと羨まれ

同

蚤と蚊と鼠と一家七人と

同

温い湯槽で調子はづれの流行歌

熱河省

岩崎 柳路

首すじがチト長過ぎる寒さなり

同

ハイヒールの女房の足へ氣がひける

同

暇人の話のネタにめくる本

今拾

石崎 柳石

排日と別に姑娘酌いで呉れ

同

キツトの靴でペタルをはづし勝ち

同

坐つたり立つたりそれも戀である

愛媛縣

月原 宵明

佛性は迷ひの中におはします

同

弟の死

落目にもなれば戀さへ打算的

大版

大鷗 喜由

寢返り大きく父母より先に逝く

同

標札の二字程かくす薦が延び

同

カメラヤを出して家賃は何日呉れる

同

バラソルをさしかけられて師は若し

同

衛生を楯に姑の口を縫ひ

大版

新見世間音

鯉轍次男 三男のも 泳ぎ

愛媛縣

荒井英賀夫

仲居する妻葛の葉に似たるかな

同

貞操論やれば女給等唄い出し

同

機關銃を恐がるやうじや儲からず

同

お嫁入りしたらその氣でやります

同

住友の個人收入除つて見る

大版

山本 三巴

できめに來たのは醫師の請求書

大版

奥野 其奥

お定たれとは云はぬ惚れて見よ

同

夏だけを洋装にした女事務

同

なま返事することばかり祭り月

同

轉宅のやゝ落着いた植木欄

同

色即是空つゝじが咲いた寺の庭

大版

畑塚柳大佐



- |                   |           |                   |           |
|-------------------|-----------|-------------------|-----------|
| エチオピア 科學に足をすくはれぬ  | 同         | あつさりと 割引されて物足らず   | 廣島縣 都 子   |
| 湯上りの 裸大尉を 蚊が襲ひ    | 同         | 突當りく 蟻の 忙しさう      | 同         |
| 思ひ切り云ふ 氣女も煙草つけ    | 大阪 北川 春巢  | 飲むことに 負けぬ體の エゴイスト | 松江 秋山 銀坊  |
| 愛すればこそ の言葉が氣に障り   | 同         | 子が無くて いつそ淋しい 晴着きる | 同         |
| せんべいの ついでに鹿は手を嘗める | 同         | 損をする 身分仲々やつて來ず    | 朝鮮 高原 惡源太 |
| 即死ならよいがと 思ふ急停車    | 大阪府 宮岡 白峰 | 角帽を氣の 毒に見る年になり    | 同         |
| もつべきは 友だと君の 肺三期   | 同         | いたはつてやれば 甘いと見くびられ | 大阪 今井 菊路  |
| 病んでゐる 恩師に歳を たづねられ | 大阪 松下 小柳子 | 命あり金あり 妻に恵まれず     | 同         |
| 警察へ氣安う 這入りゆく 鮮人   | 同         | デカメロン 男 獨りの夜となり   | 兵庫縣 林 朔風  |
| 人の 好く人にもなれず 金も得ず  | 松江 奈真井 柳人 | 肅選を汚して までの内助ぶり    | 同         |
| 夏の 雨 跣足になつて 歩きたし  | 同         | 見舞客 重湯 飲むのを見て 戻り  | 今治 谷 心府   |
| 先代の 顔そつくりで 軒低く    | 松江 松崎 讓二  | 一圓の 貸が残つてゐる 手帳    | 同         |
| 向ひまで 行くエプロンに 風があり | 同         | 糞の 蠅 喚聲の 如く立ち上り   | 大阪 内田 有耕  |
| ハイキング どののお寺か 鐘が鳴る | 奈良縣 島田 翠峯 | 見殺しにして 英國は 忙しい    | 同         |
| 似た者が 夫婦どつちも 變り者   | 同         | 低金利にかゝ はりのない 暮しやう | 大阪府 丸島 利生 |
| 似でもよい 鼻のひくさも 姉妹   | 大阪 松枝 靜波  | わが社の 事業は 大きく書きたてゝ | 同         |
| 幸福のお膳の 塗りがはけてゐる   | 同         | 陰雨やまず 入江たか子に 髭を描く | 名古屋 水田 蕪人 |



婦人乗茶種島に見えかくれ

同

酔ふてゐて指が淋しい女なり

大阪 山田 菊人

物干へ下駄一足が暮のこり

大阪府 澁口 宗夫

ゴムバンド指でクル／＼月給日

同

春らしき氣分寝まきの色もよし

同

花歸り車掌己れを眞似られる

大阪府 大坂 正一

咲けばとて薊は刺の刺の花

松山 山本耕一路

肉を削つて今一步今一步

同

大入満員痰壺へけつまづき

同

エプロンをたゝみ家政婦用がすみ

名古屋 星野 兄兒

女房がドシ／＼食べる稻荷鮎

今治 矢野 公美

二階貸して先生は一人者

同

ウサギ屋の顔がウサギに似て居つた

同

借りが苦になり何時迄も貧乏す

今治 長野 文庫

洋装の女の帽子迂りそう

京都 永井 占山

惱む事絶えず相談欄續く

同

戒める様にドラツク灯がとぼり

同

筍の重さ氣の毒がる土産

大阪 正本 水客

人のいゝ親方白紙委任状

東京 高橋 宵五

斷髪が蕨に似てるのもおかし

同

書齋まだ頑張つてゐるウイスキー

同

白粉を叱られさうな女教員

名古屋 稻垣 正穂

時計みつめて机の塵を吹いてゐた

大阪 地黄 天國

掛軸へ讀めない同志猪口を置き

同

音楽の先生細い道を去ぬ

同

下積へ関の落目があからさま

長野 高峰 柳兒

青春のレターペーパーをむだにする

東京 阿部佐保蘭

左前マダムあやつる戀を撒き

同

自動式ドアーへかぶ國の母

同

湯の匂ひそのまま持つてあがり込み

松江 池田榮之進

執務振り見渡す所長爪を劈り

大阪 藤谷 鐵雄

その心かくす櫻の木が細り

同

つき衿をそると覗けば灸の跡

同

コックまで出ていゝお客見送られ

東京 岩井 四塊



起重機に少し混んでる街の角

同

他人めく遠出の君は女事務

名古屋

花岡 堯子

氣まづくも箸置く所までみられ

松江

松崎専太郎

先生と見に来た土地へ稼ぎに来

熊本

寺田 宗正

誘惑を待てど下宿の灯は白し

同

飲めぬ爲肩身の狭い花見をし

大阪府

原田 雄雄

糸車原始の音へ更けてゆく

愛媛縣

門田共沙子

わても行くなど、妓は惚れてゐる

松江

小村 蘭蝶

馬車かたりことり時代の底をゆく

同

化粧する女ごころを偷み見る

大阪

小鹽 静路

パスが直ぐ来てあつけない別れなり

神戸

山田 凡樂

中腰でかゝむ藝者の「今日は」

鳥取縣

竹下 章泉

平凡な暮し實印かわき切り

同

馬車で来た昔を語る。山の宿

大阪府

黒川 紫香

愛人と歩む靴紐よくほどけ

松江

奥井 抱月

始球式一寸バツタも面喰い

朝鮮

廳津骨人坊

質札をもつて東京から戻り

同

賞風呂明日の天氣を世辭にかへ

石川縣

高木鈴の家

肉親が一人だけ居る手術室

山口

三原 狂路

喫茶店内緒ばなしは隅へゆき

尼崎

薦野 雨聲

ポータブル肺を病む娘をいらつかせ

同

過去堅く秘めし尼僧の寫眞帳

松江

梅本登美也

病床の父へシャボテンみんな枯れ

神戸

難波陽出男

洋食の好きな姑の總入齒

長野縣

佐々木千隈

御肥満の婦人テリヤを先に立て

同

おちついて歩けば雨もさゝやきて

尼崎

川村 觀月

六つの子東海林太郎の名を覚え

大阪

西 いわむ

十貫も違ふ角力をとらされる

松江

入澤 笑鬼

變電所社宅は赤い花畑

同

満員が以外な宿に落つかせ

朝鮮

志村 紀

ついそこの受話機に小僧つかわれる

松江

増厚比呂志

晴天がつゞき米の飯つゞき

堺

武田 柳昌

史蹟吹く風も五月のものとなり

神戸

古家野天風子

あの種もほしこの種もほし畑かり

朝鮮

豊島 松女



學生もギヤングの如き貸切車 大阪府 宮岡 公子  
 ゲンコツ一つ喰ひ度く候二日酔 松江 勝谷山川兒  
 奉公に出して氣弱い父と知れ 東京 長島 双亭  
 さようならそれが詩人の戀なりき 大阪 さ い ち  
 酒吞まぬ客へ話の種がつき 朝鮮 村野キミ女  
 マホービン父の方からまはつて來 神戸 三崎 陽幸  
 敬遜をされて能率あげてゐる 大阪 鹽津 逢魚  
 朝寝する枕へ雨の日曜日 神戸 靜 水  
 逃げ腰へ巡查一瞥くれて行き 豊和田 藤井 芳文  
 玄關へ顎で取次言ひつける 和歌山縣 神田 晴二  
 寄席に來て下駄のよこれにふとさき 大阪府 澁口 宗夫  
 謡曲も調子が合へば子の眠り 大阪府 三上竹阿彌  
 桶の音氣持よくきく晝の風呂 神戸 山本 夢一  
 夕焼を見てゐた子がゐらず丸い窓 大阪府 藤井 一更  
 振袖になれば跨げる物も除け 尼崎 山田南濃路  
 散らすには惜しい夕陽よ花の山 鳥根縣 森山さわだ  
 濱職へ我が清貧を諦める 高知縣 松本しかぢ  
 二階借 櫻 咲けども 懐手 鳥取縣 林 小判  
 就職へ過去の丙種でけちがつき 大阪 難波南海男  
 單純な男少女にを名知られ 神戸 鈴木 九葉  
 羽織ぬぐ事も女は打合せ 大阪 神谷 靜山  
 いつからか下向く癖に馴れて居た 愛媛縣 門田 雨城  
 勘定が合はず眼鏡が曇つて來 大阪 小比賀獨行  
 鐵橋へ汽車を見にゆく淋しさよ 金澤 森田 白舎  
 春雪も嬉しお前と差向ひ 鳥根縣 勝部 海棠  
 金のない者へ瞬くホテルの灯 神戸 美岡 古城  
 行樂と云ふ氣が年を若うする 西宮 藤川三代吉  
 斷髮の水着しつくり似合ふ海 大阪 辻 古杖  
 カフェーの晝兵隊さんの休みなり 松江 沖 須磨夫  
 ぐんぐんと馬首はのびたり鐘は鳴る 今治 菊池 憲一  
 算盤にお灸で齒痛癒るといふ 大阪 宮内 廣々  
 丸腰の線の太さで音頭とり 鳥根縣 曾田 大朗  
 丁稚から仕上げて丁稚使つて居 鳥取縣 田中 鶏石  
 咲いて飲み散つて又飲み酔ふて居る 同 楊 秀 峰  
 除隊兵今日は上座へ据えられる 京都 小坂ふじ彌  
 ビアノなら月賦で買ふも羨まれ 大阪 谷口 寒草

社を辭いて子の散髪も用のうち



## サンパツ

麻生路郎

小川武畫

風呂の嫌いな散髪の嫌いな  
ボ一(三男)がレンマンのやう  
に、髪を長く延ばしてゐる。  
會社を辭めて心に少しゆとり  
の出來た僕が「オイ、散髪へ  
行かんか」と云うと「イヤヤ」  
と言下に答へる。「ソナナラ  
僕がサンパツしてやるからコ  
コへ來い」と云うと、素直に  
やつて來た。ソコで古新聞へ  
穴をあけ、頭から突ッ込んで  
頸筋から毛が這入るのをふせ  
ぐことにした。疊の上へコロン  
又古新聞を敷いて、その上へ  
座らせ、頭を下げさせた。別  
にバリカンがある譯でないか

ら、机の抽斗からスクラツプ  
用の小さな西洋鋏を出してボ  
ツボツ、ハサミ切つた。相當  
長い時間かかつて、虎刈の目  
立たぬ程度までに漕ぎつけた  
幾度か途中で手をやすめて息  
を入れたことは勿論であ  
る。それでも遂に二十錢儲け  
たことになつたが二十錢の金  
儲けが容易でないことを知つ  
た。「ドヤ、これで頭が輕う  
なつたやろ」と云つたら「首  
が重かつた」と云つて目に涙  
をうかべてゐた。天邪鬼のボ  
一も流石にババの物凄いやサン  
パツには弱つたらしい。

眼

から鼻へ

ターキーが大阪に来てゐて社の近くの大坂バンシオンに泊つてゐる。朝出掛ける時と夜遅く旅館に戻る時を目がけて、附近の彼の女のフアンの娘さん達がバンシオンの門に目白押しに押し並んで彼の女を待ちうけてゐる。

それを眺めた澤田四郎作博士曰く「あんな顔を見て何んのたしになるのかなア俺の顔を見ておけばいいのに」



徳川夢聲がこの正月、朝日會館に「初春笑ひのバライテ」に小言幸兵衛を喜劇風に仕組んでやつてゐた。同じ堂ビルホテルに、泊り合せた石井漢とグルルで毎日宗教論を闘はし

漢

談

漫

語

夢聲、漢、兼子等の事ども

高尾亮雄

てゐる。どちらも一宗の開祖だといつて共に降らない。おの／＼その自分の宗儀を主張して理路整然、可なり體系をもつた哲學的のところもある。だが仲々その宗教の名稱を秘し

て明さないからおかしい。そばに聞いてゐる僕が、口を挟んで、では二人の宗教の名稱をつけてやらふ、曰く夢聲のは結婚宗、漢のはリズム宗と、兩人とも、これには別に反對もしなかつた。結婚宗の夢聲は間もなく再結婚の披露をするし、漢の方は五月十七日佛滅三りん坊の日曜に日比谷公會堂で、迷故有三界、悟故十方空、本來無東西、何處有南北、リズムは全宇宙の精神だと徹底した感念から大舞踊公演をやつて大入満員貧乏な石井が初めて興行の純益を擧

大阪の三越に「天主閣」が生れたら、東京の三越でもあつて、「富士」を出した。支店にまけるもんかといふ譯でもあるまいが一寸面白いゲンシヨーである。

☆

素ツげだか、頭筋に氷囊を載ツけて原稿を書いてゐるのを見たうちの子ごもたち「お父さんが試験勉強してゐるよ」さからかふ。お父さんばやいて曰く。「なアに、人生勉強さ」

☆

オリンピックの放送で病人が眠れぬので困つた。だから病氣なんぞになるもんぢやないと云つてゐるんだ。ドイッまで叱りに行けやしないぞ。なんだ隣のラヂオがやかましいのか。うちのも鳴つてるのさ違ふか。混戦だ。混線だ。

☆

事少しく舊聞に屬するが、朝田新水君が川柳雜誌社の改組前に社章を盗まれた。近頃よく流行る偽醫者のやうに、もう少して偽川柳家が横行

するところだつたが、今からはもう遅い。

☆

長谷川一徹博士がボク刀をあつめてゐる。親爺が斬れるのを三百ほど蒐めてゐるのでワシは斬れんのを三十ほど蒐めたがボク刀の型の變つたのは至つて妙なさおツしやる、そのボク刀に抜かねた刀こそよけれ云々といふ歌が影りつけてあるのが、いづそ扱けぬボク刀こそよけれであるさおツしやる。一寸涼しい話である。(不死鳥)

げたといふ。

× × × × ×  
 話は前へもどつて、小言幸兵衛の芝居を僕が悪評して夢聲の幸兵衛ばかりが獨り喋りつゞけて、夢聲の他の役は一人もなつちやゐない、獨りで演ずる漫談落語と大勢でやる芝居とは違ふヨといつてやつたところ、それが氣に觸つたわけのみではあるまいが、夢聲やけにウイスキーを五本ばかり飲んで、グウタラ兵衛、性體もなく、最終の晩の出演は不能となり小言ぬきの幸兵衛劇ができてしまつた。

× × × × ×  
 大阪三越で、十八年勤続、七代の支店長に仕へ、東京本店へ榮轉、間もなく若くして逝つた白名君を偲ぶの會を發起して、遺物の展觀をやつた時、きちようめんで正直な白名さんの友人寫真アルバムの中から僕と故北村兼子との二人相並んだのが現はれた。モーニング姿で若く撮れた僕と裾模様の兼子と、一寸似合の新婚らしくも見える。これは兼子が入社後、初めての新年祝賀の歸へりに一緒にとつた記念で、この日の會に

列した路郎君なんかから盛んに冷かされたが、心配御無用、この寫眞は女房にも見せて秘密のものでもなし、もう十年も前で對手もこの世にゐない。白名君の追悼會に兼子も一緒に在りし日を偲ばれたのはむしろ私としては喜ばしい。序に申す、京都眞

## 僕の髭

西田 艸 樂

如堂の境内に菩提をとむらふ大きな石像の「兼子地藏」といふのが建立されてゐるから若し東山ハイキングの通りが、りでもあつたら參詣してやつて下さい。當世文筆に志す若い女性たちには多少の御利益があるかも知れない。

友達四五人で旅行中の事、と或る田舎驛、停車中の車窓外を見ると驛の境内にある井戸端で、筋骨たくましい、眞黒く日に焦けた男が、裸體になつて汗を拭いてゐる。どう見ても田舎驛を根據に働いてゐる車夫らしい。然るに此の男、總々とした漆黒の立派な八字髭を生じてゐる處が車夫には惜しい威嚴を添へて、その體格、風體に似つかぬ滑稽さがはみ出てゐるので、一人の男が皆んな敬禮をしゃうぢやないか、てんで、一同が汽車の窓に直立して、いとも丁

重なる擧手の敬禮を送つた處、彼の髭車夫氏、今や立去らうとする汽車からの一齊敬禮を浴びせられてニヤリ／＼と笑ひながら見送つてゐたといふ。これはうちの家父の話である。髭も人品、骨柄にしつくり似つてこそ、たしかに男の持つべき顏の飾にもなる譯だが、此の車夫の髭などは、誠に御愛嬌な飾物になつてゐる如く、世の男達の髭の種々相を眺めて行くと、子供を怖がらせるもの、地貧相を如實に表現してゐるもの、地位身分をこれ見て呉れと發表してゐ

るもの等々あまり立派に飾品として使命を果してゐるものが少い。

にも不拘、こゝに紳樂といふ髭男が何の目的か知れず鼻の下にちよつびり残してゐるが今更慌てゝ取る氣にはなれず、これある故に美しい髭だと女から惚れられたためしはなく髪が佳いから月給をはずまうといふ雇ひ手も来ない。云はゞ邪魔にこそなつても、有益に役立つた事の少ない代物である。

併し此の髭から時々面白い話題が生れる事がある。

去る五月の末頃、今度出来る牧岡の公園のあたりを散策して、夕景近くにも及び、ならう事なら大阪まで歩いて見やうと、新らしくつけられた河内平野を横断する産業道路を、單衣の着流し草履穿きといふ輕装で洋杖を振りながら、花園ラグビー場の近くを歩いてゐると、前方から二臺の空の荷車が来る。先きの方の車に二人の馬子が並んで腰を掛けて打ち語らいながら馬の歩むにまかせてゐる。僕との間隔が十間位の時である。樂しさうに話してゐる馬子の一人が、突然車から飛びをりたと思

ふと、も一人の男も直ぐに習つて、銘々今迄自由に歩ませてゐた馬の口を取つて歩き出した。變な事をすると思つてゐると恰度僕とすれ違ふ時馬子達は二人共僕に向つて、いとも町重に頭を下げて禮をした。勿論顔見知りもない馬子に、だしぬけに禮をされた僕は、どうしていいか全く戸惑つてしまつたが、互に歩いてゐるものだから、急場をつくらつた會釋で行き違つてしまつたが、尙ほ安心がならぬから、何故あんな事をするかと考へた。これは全く僕の髭が作つた罪だつた。といふのは、彼等馬子は僕を警察の人と思つたのだ。花園ラグビーを東へ突當つた處に牧岡警察署がある。その非番の巡查が夕景の散歩でもしてゐると見たものらしい。で彼等は空車を腰をかけて通行してゐる事を自らとがめて、僕に禮をした事が漸く判然出来て僕は吹出してしまつた。

僕の髭はよく警察の人と間違はれる。夜歌舞伎座のほとりによく出てゐるボンビキなども、ほとんど聞取れない聲で、どうです！なんて近寄つて来るが、僕の髭をちらと見るとすうつと脇へそれてしまふ事が度々ある。あのあたりでは「賣りか買ひか」といふ仁義？があるそうで、いゝ賣りにでも當ると一夜思はぬ艶福にありつくとも聞いてゐるが、そうした幸運なぞには僕の髭は甚だアンチボンビキに出来てゐる。

尤も警察の目を掠めてゐるボンビキなどは非常に用心深いから、そんな態度であるが、遊廓の引子など厚ケ間敷いから髭位は怖れないが、それでも一度髭に參つた事がある。

商用で京都に行つた時、少し夜遅く松原通から五條通へと出るのに、うるさいがと思ひながら宮川町を通り抜けた處、例によつて道路の兩側の青樓の引子、チョット／＼なんて吠へついでゐたが、厚ケ間敷いのがつか／＼と出て来て僕を引張り込まうとしたから、僕は態度を一變し、此の短い髭を觸りながら「どうだね忙しいかね」とやつたら「あゝ旦那はん、御苦勞はんどす」と一禮に及んで引下つて呉れた「うん一廻りしてくるよ」とすた／＼通つてしまつたが、こんなのも似世刑事の中にはいるだらう。



母の語尾いゝ人だがと重くなり	長野縣 林 幹	手ごたへもなく陣情は灯に疲れ	京都 宇野狸公三
パスの中まぶしくさけた女の眼	大阪 中川 邦典	五年溜つた利子へためいき	朝鮮 村野東狂子
仲人の話ラヂオを止めさくれ	尼崎 酒井美知夫	シネマ出て四月の太陽かゞやきて	山口 西口悲戀坊
亂行の父に不良の子が一人	大阪 岡町 玻璃	ドンチャンのなかに櫻の色を見る	大阪 柳 狂
傘買ふて出れば止んでる春の雨	尼崎 八竹 正柳	眼を病みて春雨をきく四疊半	尼崎 酒井 斗風
居候横へ氣兼があつて無事	大阪 中村 靜城	催促は家の主人の癖を知り	高松 松永 廉夫
俺の息葉の息あほき樹下に居て	高松縣 松浦 一鴻	休まずにペンを運んで儲らず	大阪 庄司淡路坊
振り返り見ぬを氣強い氣と云はれ	大阪 米田まさる	辛抱の如何によつて出世もし	高松 柳 夢
きれ糸を繼ぐにも似し世を渡り	朝鮮 中内 恍二	我店となつて箒目よく目立ち	名古屋 加藤 八百
茶がほしただけに社長はベルを押し	大阪 坂 澄風	三人となれば竹馬の友でなし	大阪 星野ひろし
勞働の靴に疲れの色を見せ	兵庫縣 田邊 由布	世を呪ふひとみの底のサクランボ	松江 來間 一平
船世帶猫の背伸びを思ひやり	大阪 濱口 七步	大阪で汗の油の金を貯め	大阪 磯野 峰月
運命の目高小供の掌へ泳ぎ	朝鮮 荒木 混沌	軒下へ生きねばならぬ三味の音	神戸 砂 丘
都會から去勢をされて戻るなり	今治 長野 文庫	灰色となつて官吏の無事であり	朝鮮 汾陽大頭領
金持を罵りそして媚びてゆき	大阪 辻 いの助	母が居て躰焼く匂ひする我家	大阪 坂本遠見路
デマを覺悟の缺席と書く	今治 渡邊 晴童	遺孫へ兎に角セルの袴で出	神戸 渡邊 木履
退社してはてさて人の世の哀れ	高松縣 山内 凡愚	灸すゑてから淳々と言ひきかせ	大阪 山本 葉光
貯金デ一隣の金で間に合せ	朝鮮 豊島石燈籠	匪賊の話歸途に月さゆ	朝鮮 末次三角山



# 武玉川二篇研究 (二七)

梅 本 秋 の 屋  
森 東 魚  
蛭 子 省 二

(666)

鬼と言ふ、後家の革足袋

省ニ一革足袋は、當初男女とも用ひ、二三年使用し得たといふから、經濟的であつたのが、革の需用増加につれ値が上り、木綿足袋が一般的となつた。「今世京阪稀に用る者あり、價大略銀十二匁或十五六匁也」(守貞漫稿)で寧ろ贅澤品となつた。締り屋で鬼と言はれる後家が、遺産で贅を振舞ふ憎げさ。

東 魚 一 贅澤を振舞ふと云ふよりは、寧ろガツチリ締つてゐる方であらう。

秋の屋 一 古くは遊女 紫革の足袋を穿いたが、此の後家

のは、燻革の足袋であらう。贅澤といふよりも儉約の爲で長く使用に堪へるのを善しとするのである。

(667)

富士の夢見てまめに成母

省ニ一富士二鷹三茄子で、色々説はあるけれど、吉夢とされてある。富士の夢なれば、確に氣分轉換には役立つ。「まめ」は達者。——「禿が夢は淺草の富士」(獨あるき)。

東 魚 一 わずかな事にも、大變幸福がくるやうに思ふ、女氣の和やかさが出てゐる。

秋の屋 一 三原山を夢見て、思ひ悩む娘もある。

(668) 女こゝろに見たい 龍宮

省二 乙姫様のすむ龍宮だ。みれるものなら男だつて女性の軽い柔い情緒。

東 魚 吉原の花魁を女がみたがるやうに、乙姫さまはどんなに美しからうと、見たがるのも女らしい心持ちである。

秋の屋 簪の珠にする珊瑚樹の林があると聞いては、矢も盾もたまるまい。

(669) かんこ鳥啼庵に蔭口

省二 寂しい庵にある蔭口で主を現はして居る。

東 魚 淋しい庵に入用でもなさそうなお蔭口があるとは主は俗氣拔けの非似流者なのであらう。

秋の屋 「世を捨てゝ身は無きものと思へども」 盗人の用心には、蔭口もまた必要ではない歟。

(670) ひとりて食のにへる かみなり

省二 夕食の用意をして居ると、突然の大雷に怖れて座敷へ逃げ上る。そのうちに七輪の上の飯は、ひとりで煮える。雷の句としては見つけどころ面白し。一寸類なし

東 魚 前説通り。

秋の屋 女は戸棚の中で桑原々々。

(671) 二百十日にあちなよめ入

省二 この嫁入も例の暮の嫁と同じ持參金附。二百十日程あれて居るであらう。

東 魚 八朝に白無垢の嫁入姿、吉原を連想して、そこで「味な」であらう。

秋の屋 暴風雨のある日を特に擇んで、嫁入をするから味など言つたので、吉原の八朝を聯想するのは當らない。

(672) 石の井筒を母の念願

省二 井戸の化粧側は石か木造り、木は腐朽する。石製にしたいとは母親らしき思ひやり。

東 魚 せめて井戸側位は石にしたいね、と云ふ處に世帯に心を盡す母親らしい願である。

秋の屋 年老いた母親の念願に、石の井筒は相應はしい手つき。

(673) 手品きれいに紙燭よる妻

省二 巧みに紙燭をよつて居る、おとなしい、

伶俐さうな女性を思はしめる。

東 魚 前説通り、突然、質素な妻である。

秋の屋 十筋の白魚、但し手品といふ言葉に少し難がある。

省 二 武、十七に「指先を奇麗につかふ紙細工」がある

「手品よく味噌摺る」といふから、用ひ得やう。

(674) 袂 て 錢 を 遣 ふ 墨 そ め

省 二 明けすつばに財布を出し、手を突込むで遣ふのは風情がない。「袂」で奥床し。

東 魚 袂から取出すので、どうで大金ではない小錢である。其處に墨染姿に、ふさはしい様子が想像される。

秋の屋 此の「墨染」は僧侶のことではなく、伏見の撞木町に墨染と呼ぶ、古遊廓ではない歟。大石良雄もこゝに通つたが、後年にはさびれて見る影も無くなり、賤娼ばかり居たと聞くから、遊客も大金を遣はず、袂から小錢を出して、けちな遊びをすると云ふのであらう。

(675) 錦 木 を 内 から 立 て 縁 遠 き

省 二 内輪から錦木を立て、賣りに出さねばならぬ程

では、その縁遠さと察せらる。

東 魚 錦木にもサクラがあるとは、さても面白い世の中。

秋の屋 苦し紛れの拙策であるが、憐むべき點もあつて面白い句と思ふ。

(676) 松 明 を 結 ふ 村 の 葬 禮

省 二 上七で村の葬式用意から光景を察し得る。私は幼時この實際を見て居る。

東 魚 「松明を結ぶ」は、束ね用意するの意であらう。村としての大葬禮の場合ならん。

秋の屋 都會の葬式ならば白張提灯をつける、

(677) 佛 の 夜 の 障 子 や た は こ 塵

省 二 煙草店の障子に、妾がうつて居る。小品の夜景だ。

東 魚 障子に描いてある煙草の葉が、灯に照らし出されてゐるので煙草店と眞に肯けるのを、かく「佛の夜の」と詠じたのであらう。

秋の屋 江戸時代に、夜中表戸を明けて營業するものは

煙草店か蠟燭屋であつたから、市中でもこれが先づ目に附くのである。

(678) 小つゝみに戀を仕まける大つゝみ

省 二 大鼓が損する作句が餘りに多い。『どこやらがく

やしさうなる大鼓(武・十四)。大鼓は武張つて居るからだ

東 魚 小鼓の方が姿からして優しい。張臂したやうな

大鼓は、戀には負けであらう。

秋の屋 小鼓の音は女性的、大鼓の音は男性的であるから、これを人格化してみると、小鼓は戀愛に勝利を得る女とも言へる。決して鼓打の戀争を詠んだ句ではない。

(679) 糊立のせぬ衛士の顔付

省 二 あ顔へ糊立してみてもピンとは感ぜられぬ。

芝居でも稻荷町の役柄とせば然らむ。

東 魚 「糊立のせぬ」とは、實に奇抜な表現で面白い。

秋の屋 此の「糊立」は、餘り使用されない珍しい語である。

省 二 凡その句は「糊の利たる晝顔の花」の如く、糊利のせぬとでも詠むところを、「糊立」は面白く。

(680) 清堂は障子に残りたゝき鉦

省 二 障子はきよ書で貼られてある。内では敲鉦が鳴る。目にしつゝ耳にして、思はせしめらるゝものがある。

東 魚 早世した子供の記念のが清書、障子にはられてある。偶、看經の間に。

秋の屋 世捨人の貧しい庵室の態で、早世した子供の記念とするは、考へ過ぎであると思ふ。

念とするは、考へ過ぎであると思ふ。

(681) 五ヶ村すくふ主の有池

省 二 龍だとか蛇だとか、何々姫が主だといふ傳説の池により、五ヶ村の灌漑が出来て、百姓が救はれる。

東 魚 雨乞が池の主に聞入れられたのであらう。

秋の屋 五ヶ村と限定したところを見ると、灌漑用の池らしい。

(682) 降ぬ日の勅使を譽る角田川

省 二 「降らぬ」とは。――降る日は梅若忌であるが

東 魚 梅若の忌日であらう。丁度三月は勅使下向の時

期で、雨がふると大低定まつてゐる今年の勅使は雨性でないナといふ心持ちであらう。

秋の屋 江戸へ下向の勅使が、隅田川遊覽を企てゝ平凡な歌を詠んだ例が見えてゐる。



# 川柳と松浦静山

(三)

石 崎 柳 石

而して、静山侯の耳目へ、如何にして川柳が入つて来たか。それは、前掲にある如き城中でのトビツク、側近者の噂話等でそれも多くの句は爲政を諷刺したものが多かった。

「曩日白川侯首輔たりしとき  
爲になる伴頭いとこ同士にて  
侯頻りに節儉の令を下されし頃

あの人ゝ奢は駕籠の棒計」<sup>4</sup>巻  
「ある内局の人來りて前句を言たり

水の出てもとの田沼となりにける」<sup>10</sup>巻  
「やくに立つも立ぬも錢の裏表

これは錢の背面にて、今の閑老二人の家紋となればなり、面は永樂通寶なり、背は無紋なり、是にて想ひ識るべし、文政六年十月朔日(補、表面水野家、裏面青山家)」<sup>15</sup>巻

「落書の類埒も無きことながら、是にてその世を觀るに功なることぞ多かり

世の中に差出隠居五人あり

これ川柳句なり、其意は仙洞様、一橋一位殿、薩州榮翁、桑名樂翁、其下の沼津侯の臣土方縫殿助が父祐眞のことなりとぞ(下略)」<sup>41</sup>巻

「又曰く

栗の錢茄子の錢ほどもうからず

又同流の句、栗の名産は丹波なり、茄子の名産は駿河なり、因て笹山沼津二閑老のことを云なり、鄙劣なる詞なれども、事實には當れる哉」<sup>41</sup>巻

「川柳の句、世に流轉せしには

白河の巻の書抜き八代須河岸

或人々の程營中にて人より聞くと(中略)さて寛治の

治も、今を距ること業已に三十餘年、所謂三十年を一世とするにて、治世悉皆一變せしに、今も始終替らぬ者は八代須河岸（林子の居邸を云）なりとて、書拔とは云ふなり、八代須河岸の人望この如し」<sup>14</sup>卷

「誰人が言出し、何人が傳ふるや

坊様が二人死んではこまるだろ

今の時に當りて、眞に的切に能く言ひおほせたり、後世に至らば、何のことゝも解し難かるべし、因て註すらく、坊様二人とは沼津執政の老臣故土方縫助退隱して祔因と云へるを斥す、一はこの二月雲隠れたまへる御方を斥すなりと云ふ、天爾波は出羽なり、その深意は後世と雖も推て知るべし」<sup>16</sup>卷

「前に坊様が二人死んではこまるだらうと云柳句を載す、又聞く

橋一つ落て水勢よはくなり」<sup>16</sup>卷

「今茲松平阿州へ御養子に就き、敷寄屋橋御門内松平豆州の屋敷四千四百四十餘坪を上げられて阿州に賜はり豆州は御廓外なる柳原八名川町の津輕越州中尾舖を替地に賜はりしこと、前にも記しぬ、是につき頃ろ川柳句を聞く

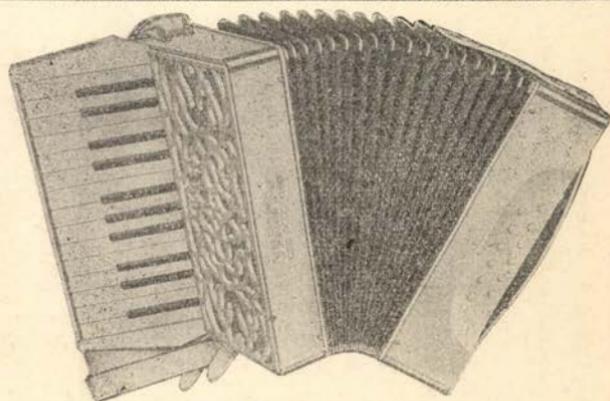
蜂がふへ蝶蝶外へ逐ひだされ

又加州侯の第一、公女御嫁あるにつき御住居の門出來るに因て、是迄の屋鋪表門前の町家右側取拂になりし此

# ヤマハ アコーデオン

- 10號... ¥10.00
- 20號... ¥17.00
- 30號... ¥23.00
- 40號... ¥28.00
- 50號... ¥40.00
- 60號... ¥60.00

カタログ送呈



60號 ピアノアコーデオン

山葉ピアノオルガン製造元

日本樂器會社大阪支店

大阪市・西區・四ツ橋南  
電話新町一〇七三番



川柳句も

御守殿が出来て町家も片はづし」<sup>145</sup>巻

「人口の遮りがたき、災後に川流句を聞けり

ふんどしが焼けたの後に紐がやけ

ふんどしは越中なり、紐は眞田組也、前火に桑名侯、

後火に松代侯焼たり、父子従ふ鄙人越中禪の狀を盡す」

續<sup>21</sup>巻

「勿體なきことながら、良史も及ばざるは

岡崎の時から御手が能まわり

實に幼兒三弦のことに非ざる也」同<sup>33</sup>巻

次に江戸市井の狀や、詠史的の柳句で僕の筆録されて

ゐるものを擧げる。

「釋尊の教も、末に至れば律戒を保つこと能はず、川

柳といへる點者の句に

大黒が鼠の衣縫て居る

都下の僧家、此類の多きことぞ聞ゆ、然るに破戒の罪

を得ず生涯を送るは、佛徳よりも官の大慈大悲なり、こ

れと云も昇平の世の有難さなり」<sup>10</sup>巻

「近頃聞く

縹緞のそばに在りコウヤチャウ

成ほど傳馬町牢屋舗の隣は、紺屋町なり尤巧なる句作

なり」<sup>23</sup>巻

「昔とて今に替らず、かゝる板刻物は賣しなり、天よ

りして川柳點者の

もう明日は鶴の繪鶴の繪

と云ひしを採たるは、いかにも古今の人情を觀通した

ることどもなり」<sup>15</sup>巻

「近來市井に私窠ことに多し、川柳の句に根津の文大

工の所に釘のおれ」<sup>22</sup>巻

「近村の氏神牛御前の祭禮のとき、市坊の戸外に掛連

ねたる燈籠に、種々の狂書奇句を書くこと例歳なり、今

年出行のとき見るに、畫に一僧（眞言宗の衣體なり）東

埔塞の下にあるを俯して視る體の上に

このかぼちや黄色だのう負けるだらう」<sup>60</sup>巻

「川柳點には毎に感ずること多し、前九年の軍は實に

長征なり、頼義もこの間には奥俗に染まれしならん

もう歸るべいと頼義御凱陣

後三年の軍も亦事體を想像するに足れり

雜兵はまた來ましたと後三年」<sup>42</sup>巻

「色情の悟道は川流の句にあり曰

おみ足をきつくさするが返事なり喝」<sup>49</sup>巻

「或人云ふ

大日は木綿普賢は緋縮緬

この句意は、大日如來と稱して芝赤羽の心光院と云へ

るに於竹と云へる婢女の遺像あり、事長けれどもその縁

起のあるを爰に擧ぐ（下略）」<sup>69</sup>巻

# 川柳書架 (五九)

## 川柳と俳諧

前田雀郎著

▼本書巻頭を飾る喜多村綠郎氏の序文を覗くと

「俳諧と川柳との機縁を知る階梯であるとともに、あはせて斯道の羅針盤たることをわたしは斷言して疑はざるものである」と述べてある。

▼内容目次を列挙すると

俳諧から川柳へ、慶紀逸の横顔、燕村以前の俳諧、狂句の發生、頭でつかち、風流袁彦道、三笠附拾遺、前句附判者雲鼓、俳諧狂時代、俳諧の點者川柳、「句兄弟」と「類句辯」俳怪談、俳諧の源氏、川柳の民謡味、川柳の文獻的價值、芥川龍之介と川柳、回首槐安夢一場、南無川柳佛、人物のゐる風景、十七字への惧れ、俳諧の厄難、柳界小

事雜稿、附録（影法師と語る、川柳の作り方）

▼巻末の「をはりに」で著者が本書を刊行した目的と態度が述べられてある。

▼昭和十一年五月十五日發行、菊版三五二頁。定價一圓五十錢。發行所東京市小川石區江戸川町一八交爾社

▼川柳と俳諧の關係を手をとつて教えるに著者位適任者はあるまい。著者は都新聞編輯局の人。一讀を薦む。

## 川柳街の雑音

橋本綠雨著

▼巻頭自序の一節から抜く

「私の作家生活は僅に十三年間で路郎先生に師事いたしました『川柳雜誌』の創刊以來、雜誌の事にも微力を盡さしていただきましたが、その間盲腸の手術で入院したり、私の川柳生活に理解と援助を惜しまなかつた先妻の入院

永眠など随分苦しいこともありましたが、それを記念するために拙い句ばかりであることは知りながらも句集を出すことを思ひ立ちました。そして集句二千餘句の中から更に先生にお願ひして六百三十九句に削つていただきました。（下略）

▼内容については著者の恩師麻生路郎氏の序文にある「街氣の少しもない句彼の生活をそのまま投げ出したやうな句、しかも何處かに彼の性格の根強さがにじみ出てゐる句」の評が一番當つてゐる。

▲昭和十一年六月廿五日發行、菊半截一一四頁。定價五十錢。發行所大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地不朽洞  
▼著者は路郎門下で自序にもある通り「川柳雜誌」の刊行に主幹を援けて悪戰苦闘を續けた人である。本句集も同誌で發表されたものばかりであるのを見て著者の態度が知られる。一本を机上に飾らいたい。

日本名所  
名物川柳

(四國の巻)

前田五健選並畫



(七) 阿波踊

阿波踊腰から下を審査する

世間音

盆三日みな氣狂にしてしまひ

同

阿波踊色氣のあるが三味をもち

同

阿波踊トキー班の聲も囁れ

同

阿波踊戀を語らふ暇はなし

同

庇から踊子殖へる阿波踊

芳文

足袋の底破れて歸る阿波踊

同

落籍されて底抜け踊る阿波踊

同

どうせもう踊らにや損の阿波踊

同

阿波踊輪を出て乳を吞ませてゐ

勝

スリ切れた草履を捨て、まだ踊り

同

新町の打水涼し阿波をどり

同

花

木履

阿呆にされお國自慢を見とれてゐ	阿波踊だんく眞似て朝になり	阿波踊妓はまだ若く三味を持ち	阿波踊見て居る方が恥かしい	阿波踊見るのに迷ふ程出て來	阿波踊高貴な方の席へ月	息きれの水をもろてる阿波をどり	阿波踊儂も阿呆の中に居り	阿波踊眞似るお客の朗かさ	阿波踊あすの朝寝を考へず	縣人會へマイクを通じ阿波踊	阿波踊年齢などはないのなり	寝つかれず宿を亦た出る阿波踊	秀逸	醉ふてない足のもつれの阿波踊	自句	巻きこまふ巻きこまれたい阿波踊
同	竹阿彌	水客	勝人	同	宵明	夕鐘	同	里子	柳石	狸公三	葉光	同	夕鐘	夕鐘	五健	

阿波踊

天正十五年七月阿波渭山城の竣成を祝する爲め城主が特に無禮講を許したるに初まり爾來毎年七月中旬に全市は一大狂騒舞曲に夜を明かす程踊り抜く「踊る阿呆に見る阿呆、同じ阿呆なら踊らぬ損じや」此の踊を見るべく近國より亦たスバラシイ人出は徳島の阿波踊が如何に名物的なるかを裏書するものであらう。徳島城は永録年間森飛彈守高次の居城たりしが天正十一年長曾我部元親攻めて吉田康俊の居城となり、更らに天正十三年豊臣秀吉四國を鎮定して蜂須賀家政の居城と成る。慶長五年家政の子至鎮後、世々相繼ぎ今日に到る。阿波踊は其の家政時代よりのものなり。(健)

日 本 名 所

京都の巻	選者 山川 紫明氏
(六) 加茂川	締切 九月 五日
(七) 東山	締切 十月 五日

投句本社宛 用紙ヘガキに限る

名物川柳を募る















# 「六厘坊十句」の 再検討

(三)

木村半文 錢

もつれ糸 小猫 獨りて 踊つてる

**日本坊** 實景の句に違いないが、縫れ糸と据えた所はチト苦んだれ、但し、見たまゝを其儘かも知れぬ「ナル程」と頷いて置けばよいのさ。

**花紅坊** 同感々々。イヤ味のない句だ  
**松窓** 日本坊君はもつれ糸が苦しんだ

と言はれるが、僕はもつれ糸とせなくちや駄目だと思ふ。もつれ糸に小猫がなんぼ飛んだりはれたりしても爪が引つか、つて取れないのでヒョイ／＼と踊つて居る所である。これがピンと張つた糸では猫も別に踊る程の事もなからう。然し、ピンと張つた糸や巻いた糸にも猫がジャンない事も萬一ないとも限らないだらうけれど、それでは

いけない、句さしても、もつれ糸でなくちやいけない、諸子に異説あれば伺ひたし、佳句。

**七厘坊** 松窓の解釋の通り「てる」がうれしい。活動してゐる。實際句迄踊つてるよ。「糸巻の向うに亭主踊つてる」と双美の句。

**六厘坊** もつれ糸は窓君の解釋通りである、上五を枕詞的にほかつと置いた所に多少自ら趣味を感じて居るのであるが、そうは取れぬやも知れず。

**角戀坊** 「もつれ糸小猫は獨り踊つてる」面白い見付所なるべし、只だ獨りさ云ふの一寸理窟に合はぬ様な氣がする、文藝の上に理窟を擡ぎ出すと云ふ法はないが、小

猫は相對的に踊ると云ふ即ち相手があるて、チヤラサレテ踊ると云ふ事に極めて仕舞ふ事は出来ぬ、杯と云ふ理窟は云ふだけ野暮好い句だよ。だが若し、僕が失禮を顧みずに「茲に獨り」と云ふのを退けて「猫の兒が踊りを踊るもつれ糸」とか何か云ふ工合に耳にさわらぬ様に仕てくれたならば一層嬉しく頂戴をするがな。杯と言文一致に改正して、そろ／＼遠慮のない持前の悪口を叩くと、次には鈴ン坊と大和尚とが控へて居るから、どんな事に成るかも知らぬ、こわやの／＼。

**鈴ン坊** 此の句は音調の上に難があるよ。それは、もつれ糸と小猫……の間に……の字が省略されてゐるが、此の省略があるために、もつれ糸で句がポツツと切れるやうに感じる。角君のひそみに做つて難を云ふと、もつれ糸のある所と小猫の踊つてゐる場所とは離れてゐるやうだ。強ひてくつ／＼けると糸其のものば小猫のぢやれた爲めにもつれたやうに解せられる。小猫の踊つてゐる動作を叙して後に此のもつれ糸でこめたならば句はしまると思ふ。

**劍花坊** 「目もあやに小猫の踊るもつれ糸」として頂戴する。

なぐさ 理窟を言へば切が御座らぬ。何んさでも云へるものに候。此句劍先生の目もあや」にて頂戴。

あくべ 綺麗さつぱりとした句にて、調は一寸古き様に見受けられ申す。

六厘坊 「目もあやに」では句が固まつてしまふ、この句はもう少し活躍しないといけまいと思ふ。

半文錢附記 原句は小猫がもつれ糸にぢやれてゐる印象をそのまま、採り上げて句にした即景即興である。だから、その印象さへ如實に顯はされたら、猫の位置も、もつれ糸の位置も問題でない。要は、目前の光景そのものが一番興趣を惹くのであるから……そこに直觀の正しさがある。然し、この儘では如何に平淡な輕味を狙つたにしても首肯しがたい點がある。即ち幼稚なる觀點であるからだ。なるほど、小猫がもつれ糸に踊つてゐる可憐な點景は髣髴するが小猫自身にまつて直觀の眼を動かさなければ平板無味に化して了ふであらう。その點で劍氏は「眼もあやに小猫の踊るもつれ糸を改作したのは一見識である。單なる印象より一步進んで「目もあやに」と小猫に對する印象を明確にせしめてゐる。謂は、

小猫それ自身を印象的に深めてはゐる。尤も、六厘坊の批難の如く目もあやには初五さしてのリズムに快い波動がない。小猫の踊つてゐる動作としては寧ろ原句の方が活動的である。なんだか首につけた鈴の音まで鳴るやうに思はれるが、改作によると、さうした鈴の音の聞き得らるるほどに、リズムは快音ではない。唯、小猫を描寫する上に、その姿態をハツキリさせる上に一段の効果を認め得るに過ぎない。それだけ、手法は物堅く且つ靜的である。是が可否は自ら其の兩面に胚胎する。小猫自身の動作の上からは原作の方が活動的であり、印象的な形態の上からは改作の方が明確である七厘坊の引用した古句「糸巻の向うに亭主踊つてゐる」に比較しては、逆も双美の價値はなく、づつと下位の部に屬する。古句の「糸巻の向うに」の如き老巧な寫實には敵すべくもない。而も、この間の夫婦に對して微笑しき情景が浮き出でゐるに對し、小猫の方は極めて通常の光景でしかない。位置さ、人物さ、動作さのハツキリした點なご考慮しなければならぬ。原作は日本坊の批評の如く「見たまゝを其儘かも知れぬ」の「知れぬ」ではなく、「見たまゝを其ま

ゝである」のだ。角戀坊氏は「小猫獨り」さいふ點に難があるらしい。即ち小猫は他にじやらされる相手が必要ならぬ。だから獨りさいふのは相對的でないさの口吻を洩らしてゐるが、「多少付度しにくい文意ではあるが」この場合は相手は人間でなく「もつれ糸」であつて、それが相對的な位置に置かれてゐるのだから少くとも訝しむに足らぬ。尤も、リズムが可けないと言ふならば別問題ではあるけれども。——亦、一方鈴ン坊氏はもつれ糸と小猫の位置さが離れてゐるやうに難點を擧げてゐる。勿論、同氏の説のやうに「もつれ糸」の次に「に」の字があれば申し分はないのだが、それでは字餘りにもなり、且つ、説明的にも流れて面白くないから、作者はわざと斯く上五に置き「枕詞的にはかつと置いた所に多少自ら趣味を感じ」たものに他ならぬされば作者は糸と猫との位置の隔たりなどは毫も意に介して居らない。むしろ、この方自ら得意に感じてゐるらしい。果して鈴ン坊氏の指摘するやうに「に」の字がなければ、もつれ糸と小猫の位置は空間的距離を餘儀なくするであらうか。これは研究する價値が若干存する。(以下次號)



# 柳界展望

全國川柳界のこゝ、各地川柳家の一擧手一投足をこの展望欄ですぐわかる様にした。皆様の御通信を歓迎する。

## 催し

に打たれる。▲大分番傘五周年句會が七月十二日に催され水府、夢路、雲雀、砂人、波郎、文久の諸君が出席された。▲あやめ見川柳會(山形)では七月十二日十周年川柳大會を開催され百數十名の參會者あり、東京より、大谷五花村君(川柳人協會名譽會員)と宮尾しげか畫伯が出席され、地方に稀な盛會であつたこのこと。▲第六回海峽親善川柳大會が八月廿三日函館市末廣町東部事務所の樓上で開催されることとなつた。盛會を祈る▲大連柳壇の先覺立川四馬翁追悼會が大連に於て八月のお盆に催さ

れる筈。

▲坂井久良伎翁(川柳人協會名譽會員)に川柳をきく會が向島百花園に於て七月廿五日に開催された。▲加能川柳社主催で「裏日本川柳大會」が開催される。場所(金澤市西町佛教青年會館)日時(十月十八日午後一時)兼題選者として窪田銀波樓君(本社客員)安川久流美君(川柳人協會名譽會員)櫻井六葉君▲根上川柳會納涼大會が七月十二日加賀舞子で開催され、金澤より安井久流美君が出席され、盛會であつたこのこと。▲金澤川柳聯盟では八月一日より三日間同市觀音町壽經寺に於て連夜句會を開催された。▲金澤市に發行する(毎月二回)浴場理容新聞に川柳欄を新設、雜吟募集、締切毎月五日、廿日、投句所、金澤市千日町安川久流美君宛、用紙ハガキ、秀逸呈賞の事。▲麻生路郎君(川柳人協會理事)は十九日午後九時、中央放送局に於て、過般募集され

## 川柳家戸籍調 (續)

(係) 綠 雨

- (1) 姓名(2) 雅號及別號(3) 生年月日(4) 出生地(5) 現住所(6) 職業又は勤務先(7) 好きな句(8) 自信の句(9) 川柳以外の趣味(10) 配偶者子供の有無(11) 嫌ひなもの(12) 川柳に手を染めた年月

(477)

水川浮沈子

- (1) 水川恒三(2) 浮沈子、竹堂
- (3) 明治二十八年四月四日(4) 香川縣九龜市(5) 同上(6) 酒類商
- (7) 南無女房乳を吞ませに化けて來い(古句)ウィンドに嫁げ嫁げと教へられ(夢路)(8) 拍手の音で日本の夜が明ける、追微が入るなと思ふ段梯子(9) 登山、スキー政治漢詩、書篆刻(10) 妻有、一男一女を儲く(11) 別段なし(12) 大正六年五月頃

(478)

深野 吾水

- (1) 深野福太郎(2) 吾水、浮傘洞

に「雑吟」支關を放送される。▲  
▲番傘川柳社(大阪)に於ては近  
二十五周年を迎へるため其の記念  
事業の豫告を左の如く發表した、

一、記念大會(會場未定)

二、大懇親會

三、番傘句集刊行

四、記念特輯號發行

五、外計畫中のもの數種

川柳若葉會(大阪)では、七月一日  
ユニオンビル西ノ宮工場を見學  
された。

### 吟社の創立

なぎさ吟社(秋田)が南泥、星斗  
南柯諸君の努力で秋田縣新屋町に  
創立された。發展を祈る。

▲川柳同人社(京都)が大島無冠王  
君等によつて創立された。尙八月  
十六日午後七時から四條驛手東仲  
源寺で創立句會が開催される。

### 展 界 柳 源寺で創立句會が開催される。

望 ▲川柳獨活(福島)は東北川柳が川

柳研究(東京)と合併したため、東  
北福島を守る人々によつて發行さ  
れた。▲仁川川柳社(朝鮮)の發行  
になる長鼓が八月號を以つて廢刊  
される事になつた。柳界のために  
一抹の寂寥を感じる。▲川柳と自  
由(東京)は六月號限りで突如廢刊  
された。▲同人(京都)は京都市六  
角通油小路西、川柳同人社から其  
の第一號が九月一日に刊行される

### 消 息

▲橋本綠雨、福田鷓蜂の兩君の二  
家族では八月一日箕島でキャン  
プされ、翌日は白濱に行かれたとの  
羨しい旅だよりを頂く。▲朝田新  
水君は伊勢参りをされた。▲石會  
根民郎君(松本)から、七月三十日  
林革及君(石川)八月二日本田溪花  
坊君(川柳人協會名譽會員)の訪問  
を受けたとのたよりがあつた。▲  
食滿南北(川柳人協會名譽會員)岸  
本水府の兩君は七月廿五日天神祭  
渡御の供部に就かれた。▲上野十

(3)明治三十一年八月廿一日生  
(4)大阪市安土町四(5)天神橋北  
詰(6)元市電勤務今は佛壇屋(7)  
路郎氏の蛇の目傘小さく斧さ書い  
てあり 葎乃氏の飲んで欲しやめ  
てもほしい酒をつぎ(8)強ひられ  
てする前だれも面白し。凡人に産  
業道路あつげなし。(吾水)(9)ラ  
ンチュ飼育、げて物(10)初胡さの  
間に女子一人(11)うまれつきせん  
まいが嫌い(12)昭和五年の春から

島の「花の里」に於て開催された。  
▲橋本綠雨君は大阪市正廳に於て  
市電氣局廿五年勤續の表彰をされ

(13) 澤田佐一郎

次の句を寄せられた。「勤續と大  
大阪はのびるなり」▲秋田川柳社  
の大會へ前田雀郎君が出席される  
の事。▲麻生葎乃女史は七月十  
日から病臥されてゐたが未だ離  
床はされないが氣分のよい日はこ  
たちに江戸川亂歩の探偵ものを讀  
ませて聞いてゐられますから御同  
情をたまはつた方々によるしくさ  
のこ。▲蛭子省二君は八月下旬  
には別府温泉に療養のため轉地さ  
れるとのこ。▲竹田苜蓿君は七月

(1)澤田佐一郎(2)萬石、綠波、  
昭和七年二月十一日より佐一郎  
(3)明治三十六年五月三十日(4)  
京都市中京區猪熊通三條上ル(5)  
京都市中京區岩上通三條上ル(6)  
京染店(7)俺に似よ俺に似るな  
子を思ひ(路郎)馬鹿な子はやれ  
かしこい子はやれす(夢路)等々多  
し(8)なし(9)何でもやりたき方  
なれど發表する程のものなし(10)  
妻あり、子なし  
(11)なし(12)番傘十五卷中げより

柳 廿九日富士登山をされた。▲福田 誌社同人を五月に辭され、只管療 養にいそしんでゐられたが、六月 二十三日に永眠された。岸上商店 協會常任理事)は目下眼病再發で 望 展 界 された。里十九、新水、豆秋君等 が會葬された。哀悼。

改 號

轉 居

石川梧郎君は邦花(大阪)和田三柏 君は遠矢田(神戸)平松ひさみ君は ひさ美(東京)川島柳水君は松嵐 (東京)伊藤碎花君は彩花(足利)小 林上の子君は康二(東京)

其の他

綿谷摩耶火君(東京市杉並區天沼 三ノ七一五) 佐々木せいち君(大阪府下豊能郡 小曾根村長島)

▲川上三太郎君(川柳人協會名譽 會員)は八月號の『現代』に『笑ふに 笑はれぬ話』を執筆された。▲麻 生路郎君は明るい家庭に『ピルの 机で』を連載され、薬店講座に『街 のスナツプ』を八月二日の大阪朝 日新聞コードモのページに『川柳の 作り方』を執筆された。▲全國各 地に散在する各川柳吟社の連絡融 和をはかりかつ川柳の向上と擴大 強化を目的にまづ東京と横濱の七 吟社が合併して『京濱川柳吟社聯 盟』を組織する事となる。▲岸本 水府君は流行の粹社發行の『粹』七 月號に『浴衣の人間味』について執 筆されてゐる。▲石曾根民郎君は 『土の香』に『指切茶柱、蜘蛛など』 を執筆された。

計 報

▲『湯の村』同人新井宇宙君が五月 二十九日に逝去された。享年七十 六才、法名は富賢安康居士、合掌 ▲『長鼓』同人杉本唐船君が六月二 日廿才の若さを以つて急逝された 哀悼。▲『川柳隊』の田澤有石君の 母堂が逝去された。謹んで哀悼の 意を表する。▲熊谷紅君は川柳雜

小川百雷君(大阪市西成區吉田町 一三〇) 林 世香君(名古屋市中區瀧子通 一丁目八鈴木方) 矢野景舟君(丹後宮津町字河原 二) 飯沼萬花君(岐阜市京町二丁目 一) 太田三宵君(東京市中野區野方町 一ノ七五二岩堀方)

讀初め句會(は昭和六年二月十一 日より) 市川與詩一 (20) (1)市川正一(2)詩典一(3)大正 四年七月二十一日(4)大阪市旭區 新喜多町三〇七(5)石同じ(6)唯 今療養中(7)妻を亡くしてハンカ チが見あたらず(柏茂)泣けるさき 男に泣ける部屋がなし(天國)(8) 佇めば浪花の暮れる水の嵩、煩惱 をまぶたのうらへおししづめ(9) 映畫・映畫・映畫(10)どちらも残念 ながら無し(11)お山の大將(12)昭 和七年秋 (81) 三崎 陽幸 (1)三崎三郎(2)陽幸(3)明治四 十一年四月十三日(4)岡山縣勝田 郡南和氣村(5)神戸市兵庫區今出 在家町一丁目一〇(6)鐵道職員 (7)私は好きな句と云つても何よ り川柳として形にはまりそして 誰れから見ても解し得る句が一番 好きです(8)一年前の句、植付け を終る青田に星一ツ(9)雜誌位な

私と機見女と編輯に夢中になつてゐる隣室でリリとポーとが海水浴の姿をして疊の上を泳ぎ廻つてゐる。

私はこのいちらしい姿態を見せつけられて、せめて一日でも編輯を休んで濱寺か高師の濱あたりへ連れて行つてやりたいと思つたが、今の僕にはさうした私情をさしはさむ餘地のない立場に置かれてゐる。夜の一時、二時までも萬年筆の握りつゞけた。遂々昨日は鼻血が出た。

今日も氷囊を頸筋に乗つけて書きつづける。ガン張り屋の私に辨明なんかしてゐるひまはない。それよりも黙つて雑誌を投げ出せば、文句は七里けつばいだ。いそげ〜、いそげ幌馬車だ。私を信する人たちのために。

残暑御伺



川柳雜誌社

社主

麻生 路郎  
麻生 乃郎  
内盛 季美  
河盛 純  
岡林 義次郎

もので時には劍道もやります(10)昭和八年からです。(11)なまこ、(12)大正十四年二月より我が母校の校長に夜學の時間に教えられ現在に至るものです満十一年

(426) 星野 兄兒

(1)河村豊(2)星野兄兒(3)明治三十二年一月十四日(4)名古屋市南區正木町闇ノ森(5)同市中區南伏見町二ノ二八(6)印刷業(7)戀のない頭さつげり五厘刈(天天)(8)御主人も大事 我身も又大事(9)俳句(10)有、一男一女(11)約束を破る人(12)昭和七年八月十五日

(427) 梶原 溪々

(1)梶原賢三(2)溪々(3)明治三十八年八月二十八日(4)大阪市(5)大阪市西成區新開通二ノ一七(6)銀行員(7)逢ふた日丸覺へてゐるも女の氣(柳樽初編)(8)説教をきき入る姿神に似る(9)玩具蒐集(10)妻あり。子供なし(11)なし(12)大正十年七月



# 一路集

募集句

## 金 魚

### 西村明珠選

もの想ひ金魚の動く<sup>ぎ</sup>の部屋  
末の子の機嫌に觸れた金魚鉢  
飯粒へ金魚小さな意地を見せ  
盆栽の話もわかる金魚賣り  
金魚さて荷物になつて引越<sup>ま</sup>  
待合の金魚ゆつくり泳いでる  
落ぶれた目<sup>ま</sup>は金魚が邪魔に<sup>ま</sup>  
春の陽は永く金魚へ人だかり  
金魚鉢 眺め構想 まとまらず  
遠雷へ静かに金魚浮いてゐる  
静かなる朝よ金魚と人間と  
生きてゐる文けの廣<sup>ま</sup>金魚鉢  
夜店から金魚を買<sup>ま</sup>直ぐ戻り

一角 肩車金魚へ鼻が當りそう  
美知夫 癒<sup>ま</sup>子がキチンと座<sup>ま</sup>金魚鉢  
七歩 木履

### 湯 上 り

### 高橋かほる選

骨人坊 湯上<sup>り</sup>へビールがほしい頃にな<sup>ま</sup>  
蕪人 湯上<sup>り</sup>へ蛙おんなじとこにな<sup>ま</sup>  
雨聲 湯上<sup>り</sup>の頃を計つて着<sup>ま</sup>來る  
正柳 湯上<sup>り</sup>の鏡へ胸を廣げてみ  
いの助 湯上<sup>り</sup>で 見る作業服 尊まれ  
葉光 湯上<sup>り</sup>の彼の女恥か<sup>ま</sup>と<sup>ま</sup>笑み  
静波 湯上<sup>り</sup>の糊をもんでる 優男  
芳泉 湯上<sup>り</sup>で三人揃 ふた 洗髪  
正穂 湯上<sup>り</sup>の物足りなさは一人旅

雨聲 湯上<sup>り</sup>の時に夕刊少し濡れ  
水客 湯上<sup>り</sup>の動かすなつた煽風機  
澄風 湯上<sup>り</sup>へ思ひ出したる戎ばし  
正柳 湯上<sup>り</sup>の女同志のうまが合ひ  
しげる 湯上<sup>り</sup>の一人は若い女連れ  
葉光 湯上<sup>り</sup>の氣分の一つ漫畫見る  
雌雄 湯上<sup>り</sup>の女の眉をうすく見る  
蜂月 湯上<sup>り</sup>の妓は大通りまで一緒  
静波 湯上<sup>り</sup>になつて <sup>ま</sup>取り出され

有耕 差押へ金魚の水が汚れて來  
觀月 榮轉の便りへ金魚美しき  
新水 廢嫡となつて金魚をうらや<sup>ま</sup>  
東狂子 金魚屋は世辭を忘<sup>ま</sup>た<sup>ま</sup>様に賣り  
菊路 可愛がり過ぎて金魚を皆死<sup>ま</sup>じ  
春秋 金魚鉢こゝのくらしに飼<sup>ま</sup>は<sup>ま</sup>れて  
喜和子 來客の世辭にまかせせる金魚池  
四塊 金魚屋に大<sup>ま</sup>下駄の兒が躓み  
悲戀坊 そのままの姿で金魚死<sup>ま</sup>んで  
雅幽 藤椅子の目に吊り下げた金魚鉢  
同 家中の晝寝を金魚泳いでゐ

# お岩さん印税

不 朽 洞 主 人

故 吉 岡 鳥 平 畫

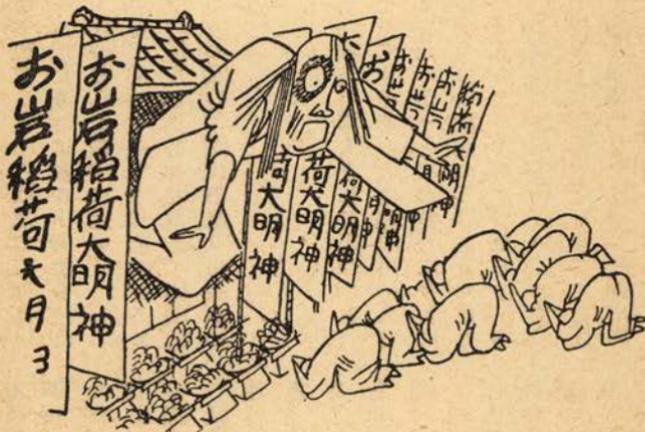
幽霊が出る？

そんなことがあるものか、それでも實際見たんだといふやうな話が涼み臺を涼み臺らしくする。そこで何處の雑誌でも、寄席でも、夏は怪談の一手販賣でお茶を濁すことになつてゐる。

「川柳雑誌」でも、と云はれるといささか辛いが一寸それを取扱つて見やう。尤もこゝでドロ〜と凄えのを一枚出して折角の諸君の睡氣を覺まさうといふのではない。

私は曾て大阪時事へモダン怪談と云ふのを一二回書いたことがあつたが身邊で起つた實話だけに凄味が足りなかつた。モダンと名がつ

くものに碌なものはないなアと我ながら感心したが、矢張り怪



談の作者は怖ろしく神経衰弱に罹つてゐないと駄目だと思ふ。

怪談の人氣は何んと云つてもお岩さんだ。毎年夏が來るときまつたやうに、寄席に、芝居に、雑誌にお岩さんが出演する。そしてヤンヤと喝采を博する。觀衆や讀者がよくも飽きないものだと思はれるが案外觀衆や讀者と云ふものは日本人特有の健忘症だからウマク出來てゐる。

句樂の句に  
猛烈に化けて  
お岩は榮られる

といふのがある。お岩さんのフアンが多いこと押して知るべしである。

そこでツラ〜と考えるまでもなく私がお岩さんの六代目の孫か何かであつたとして興行權や印税がボカ〜這入つて來るとしたら、夏はどツかの別荘で、晝寝の夢も圓らかであらうのに……と思ふばかりである。

# 言宣人業職柳川

私はいよ／＼川柳で飯を食ふことにした。

イヤ喰べさせて貰うことにした。この問題についてはかなり以前から考えてゐた。曾てそのことを鳥山一步君に談したこともあつたが、その當時の川柳家の誤解を避けるためか私がブロンエシヨナルな川柳人になることを同意されなかつた。しかしこれは時期の問題でいつかはさうしなければならないし、いつかはさうなるものだと思つてゐた。ところが川柳雜誌社のお家騒動が、はしなくも私を職業川柳人にしてしまつた。

と云つたところで、今のところ、すぐそれが實現するものとは思つてゐない今日の米代が直ちに私の川柳から生れるとすればそれは奇蹟に近い。

しかし、世の中のこととは能はざるに非らず、爲さざるなりである。非職業人としての私の苦悶はあまりに長かつた。

私が「職業川柳人として起つことの發表を見てオヤあの人には職業川柳人はなかつたのか」と事の意外に今更のやうに驚くのは世間の人で「そんなことが出来るのですか、私たちは川柳を樂しみに創りさへすればいいので、川柳で飯を食はうなどとは思つてゐない」と變な眼使ひをするのが所謂川柳家ではあるまいか。

私が「川柳雜誌」を出して間のない話だが、西宮稅務署が雜誌發行による所得稅を課して來た。私は彼等の認識不足をひそかに笑つて釋明これつとめたが、遂に容れられなかつたことを記憶してゐる。私は日本で唯一人の趣味の課稅を甘受した。

私はある種の人たちからある種の用件を依頼された。別に謝禮をすべきである場合にも、その人達は私の營業であると信じてゐる。「川柳雜誌」の購讀を以て謝禮に代へた。私は有難いやうなくすぐつたいやうなことに度々ぶつゝかつたが、釋明はしなかつた。しかし私を知る多くの人は私が川柳雜誌の刊行で衣食してゐるといふ誤つた認識の下に、私に最適の仕事があつても私に與へやうとしなくなつたので、私の職業戰線は日に月に縮少された。そして私は生活に窮すると、首を賣るのを常とした。折角伸びやうとする「川

「柳雑誌」のためにみす／＼不利益である  
と知つてもそれは止むを得なかつた  
のである。

× 私に恒産がない限り「川柳雑誌」の  
刊行と私の家庭生活とは不可分の難行  
苦行を続けねばならなかつた。

社業を伸展させやうとすれば、家庭  
生活は極度に壓迫され、家庭生活の補  
充を劃策すれば社業は微々として奮は  
ない。又しても孝ならんとすれば忠な  
らずの苦楚を嘗めざるを得なかつたの  
である。

× 私はこの矛盾を指摘して、経済的確  
立を基礎とした社業發展策を同人諸子  
に圖つたことは一再にして止まらなかつ  
たが、もと／＼非營利的事業の事ジ  
ンゼン今日に及んだのであつた。  
非營利的柳誌經營を棄て、私と私  
の家族を中心とした生活、そこへ行か

うとするならば、今の私は絶好のチャ  
ンスだと云はねばならないが、それを  
敢えてしないのは私によつて川柳を呼  
吸してゐる多くの人達のあることを想  
ふからである。

× 私は萬難を排して「川柳雑誌」の簡  
人經營を應諾し、茲に斷然職業川柳人  
として起つに到つたのである。しかも  
前述の如くこれによつて口に糊するこ  
とはあまりに薄いのであるから、例へ  
職業川柳人を標榜するとも其の完成を  
遂ぐるまでは著述業者としての麻生路  
郎をもお忘れなく御後援を仰ぎたいの  
である。

× 本誌七月號で「川柳雑誌」を今後麻  
生路郎の簡人經營とする旨を發表した  
ところ、二三の柳誌では路郎氏の簡人  
雑誌になつたと報道されてゐたが、  
「川柳雑誌」は決して路郎の簡人雑誌に  
なつた譯でなく、簡人經營になつたの  
であるから誤解のなきやうにお願いし

たい。

× しかし今更、月並宗匠の轍を踏んで  
「この句もあの句も誠に結構でヘイ」  
とツルリと額を撫でる藝當は出来さう  
もないので、選句に執筆に就いては今  
迄と何等變らないから、その點は御心  
配御無用である。たゞ選句に講演に、  
出張に際して特に御高配が願へれば小  
生のからだのあいてゐる限りはお使ひ  
下さつていゝといふことを御承知あり  
たいのである。

— 麻生路郎 —



# ほづらか一題

天 井 姫田 夕鐘

天井と云ふらん、いつべん食べへんかよし来たど二人の小僧が丁稚車をぼんと投げすて、船場御靈ぼんの裏のさゝやかな天ぶら屋へ這入った。

舌ざわりのいゝ天井であつたがなんぞ勘定が、二つで一圓と二十錢。二人は顔を見合したお互ひの財布をたいてやつと一圓二十錢に達した。外へ出てもういつべん顔を見合した

こんな筈やなかつたになあ——  
それもその筈大阪でも有名な天寅さばしる由もない。當時小使を貰らつてゐたのが隔期定即ち二ヶ月が金十錢也。

そのひさりの相棒が僕であつたと思ひたまへ。

## 街に住めば

高橋かほる

久作みたい二人のお爺さんの云ふ事には「わし、此前行た時、月組やつてん今度何組やる座席券三十錢張り込んで行くか」「行こや……あ期らか〜」

## 三越の休憩室より

スポーツを知ると知らぬととにかくオリンピックは話題に上つた。大阪三越の風呂敷賣場では新聞のオリンピック記事を風呂敷に染めて、その翌日もう賣つてゐた。風呂敷のニュース化とも云へる。

×  
男物の洋傘が重いとあつてこの頃手元の中を空にして、長さをステッキ位に縮めた洋傘を、これも三越で賣出してゐる。二十五匁位しか軽くはないが、突き良いのと共に、何だか軽く思はれる。一寸した思ひつきだ。

×  
日傘が賣れるさは妙だ。しかし若い人達の間まで、日傘が溲溲してゆく現象は事實らしい。

×  
この頃着手した大阪三越の冷房装置、今年間に合はるのは残念だらうが、慌てゝ手を附けなかつただけつまり冷房を宣傳の用具に供しやうと云ふ野心がなかつただけ、今度の装置は大分研究されたものらしい。無茶苦茶に温度を下げず、寧ろ濕氣を少くしてサラツとした涼しさにするとは嬉しい。今までの冷房では何しろ働く人にしても、出勤しては冷され、歸りては暖められるのでは、膳の上の刺身よりわが身の方が氣になる。痛められた咽喉を巻いて冷房怨嗟なんて凡そ近代人らしくない。

×  
洋傘と云へば今年の夏は、どうしたものか男持の日傘が去年の三倍位三越で賣れたと、クレパネットを薄く絹で織つた瀟洒なものが多い、どうしてこう賣れるのか分らない。ノンハットの流行が、日傘を買はしむるんだと三越の人が云つてゐた。それにしても帽子より却つて厄介な

×  
路郎さんがこの頃見事な藤のステッキを抱えて溲溲してをられる。三越で加工したものらしい。新秋になつたらあれに三越の流行中折帽「ニューヨーカ」型でも被せたら、昔の相撲選手さば見えないう堂々たる紳士だなア……(蛙)



編 輯 縦 横

▼本誌は改組と同時に三段跳びの勇躍を開始した。それにつけても御高配を賜つた方々の好意には感泣してゐる。

▼百貨店と違つて我社の編輯室ではこざわるまでもなく冷房装置はしてゐない。その代り云つてはなかしいが元手入らずで暖房装置としてあるコレは天恵の抵抗療法だと言へば云へる。

▼しかし、私達は水銀の昇騰を無視して編輯に没頭した。例年であれば本誌は八月特輯號であるべきだが改組以來の本誌では贅澤な特輯號を出すことは止した。寧ろそれ以上の熱意を以て苦闘に次ぐに苦闘をもつてしたその點に充分認めていたゞけるだらう。

▼本誌が一度度蹴躓いたことを知つた柳友諸君の同情と激動に涙ぐましいものを感じた。す

べてのものを犠牲にしても好意に酬むやうさいふ血が編輯子の五體を駈け巡つたが、時も時内助が病臥して私の苦悶を一層加重した。しかし私は悲觀しなかつた。整理と創業、この二つの仕事を一時に引き受けた苦闘振りて押し進んだ。

▼八月四日には高知から竹内機見女が來阪した。私の仕車を援けに入社したのである。機見女は御紹介申上げる必要のないほどの柳界に知られてゐる閨秀作家の一人である。柳界の事情にも通じてゐるので、私にとつては願つてもない片腕である。着阪早々机上に街頭に夜を日に次いで働いて貰つた。

▼本誌は本號から毎月十五日發行に改めた。改めるものは何んでも彼でもゲンゲン改めることにした。今後も幾多の改めることがあることを豫測してゐる。その點、讀者諸君のよりよき御注文、望ましいのである。

▼「近作柳樽」欄は本號から二段組みにした。これはいゝか悪いか疑問であるが、兎に角斯うする必要を感じたので改めたのである。同時に「川柳塔」の創作

も粒々集もこの「近作柳樽」欄に入れてしまつた。すべての作家に一堂に蒐つていた。これからはこゝでみんな粒々相摩して闘つて欲しいと思ふ。そのうちに川柳人協會の役員のために「川柳塔」の復活は豫約して置くが、たゞ「川柳塔」が復活されても先づ「近作柳樽」へ十句送つてその價值を世に問ふことを忘れないやうにお願ひしたい。

▼次ぎに今迄の「各地柳壇」の遅れ勝ちの發表を早めるためと言つた句のレベルを高めるために、非常な厳選をして本號で六月末日迄の會報を全部収載した。今後此の欄には特別の場合の外前書や選者名などを省くことにした。

▼「二路集」は創作奨励のため、懸賞募集した。今迄二題募集は川柳人協會の役員にお願ひすることにした。この欄のカットの蛇はオリビックではないがみんながへビーをかけて力闘して欲しいので選んだ。ノ々打ち廻つて苦吟した句であると思つてくればカット代が助からな

い。  
▼塚越正光君の「指導講座」は遺憾ながら本誌に乗り遅れた。擔當者塚越君は御承知の財の教の創業數月の今尤も忙しさにあるもので、愛讀者諸君もこの乗遅れには寧ろ御同情が願ひたいのである。同君からは是非間に合はしたいさいふ通信もあつた位であるから、編輯子もその好意を汲んで代つて諸君にお詫びする。

▼「武玉川研究」はお家騒動とは無關係でゲン／＼研究されてゐるので、本號の續く限り掲載されるものと御承知あつて御愛讀が願ひたい。

▼拙稿「サンパツ」は冷汗ものですが、陽春四月に會社を辭めてホンの一寸の間の心のゆさりをお目にかけたまでである。悪文は兎に角、小川武喬伯の漫畫を味つて悪文の埋め合はせをしていただきました。  
▼本誌次號は「柳壇今昔」號として新秋九月の爽涼に具へることを約束したい。御期待を乞ふ。(路)



### 投稿規定

- ▲投句は本社發賣の投句用箋、官製葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
- ▲「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る。
- ▲「川柳塔」への投句は川柳人協會の役員に限る。
- ▲各地會報は半紙判原稿紙に清記の事
- ▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。
- ▲書體はなるべく階書「川柳雜誌原稿」を封筒に朱記の事
- ▲締切は嚴守されたし。
- ▲投稿其他につき御問合せはすべて返信封入の事。

### 募

### 集

### 第十三卷第十號懸賞課題

九月五日締切

(十句以内)

魚 森 東 魚選

### 第十三卷第十一號懸賞課題

十月五日締切

(十句以内)

竹 西 田 艸 樂選

### 每號募集

近作柳樽(雜吟) 麻 生 路 郎選

各地柳壇(會報)

文章(評論研究感想吟行漫文漫畫)

### 懸賞句規定

- ▼天地人三位に薄謝を呈す
- ▼一般懸募歓迎

### 定價

一部 金三十錢  
 一箇年前金(特輯號共)壹圓八拾錢  
 一箇年前金(特輯號共)三圓六十錢

### 廣告料

本誌への廣告に就ては發行所へ直接御一報下さいませれば御相談に應じます。

○御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實です○誌代受領は送本によつて御承知願ひます○送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金下さい○御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける様に願ひます。但集金郵便は一年分には定價の外に手数料十錢を申し受けます○御注文には何月號よりと御指示願ひます○轉居又は改號等の節は舊新併記の事

昭和十一年八月十日印刷  
 昭和十一年八月十五日發行

第十三卷第八號  
 (毎月一回十五日發行)

編輯兼發行印刷人 麻 生 幸 二 郎  
 大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地

發行所 川柳雜誌社  
 大阪市内西成區玉出本通三丁目三六番地  
 電話天下茶屋二五七九番  
 攝智穴阪七五〇五〇番

支社 東京市芝區南佐久間町一丁目五二番地  
 川柳雜誌社東京支社

有禁 證無 新斷 紙轉 法載 刊載

### 賣捌書店

(大阪)大賣捌參文社 大寶書店 明文堂 其他 市内各書店  
 (東京)丸の内東京堂 嚴松堂 やつ吉岡書店 西玉森堂 紀伊國屋 三味堂 (神戸) 米田 寶文館(函館) 石塚(京都) 三宅(名古屋) 靜觀堂

# 川・雑・案・内

六版百字十四字三行金五十銭、一行増すと  
 六版百字十四字三行金五十銭、一行増すと  
 六版百字十四字三行金五十銭、一行増すと  
 六版百字十四字三行金五十銭、一行増すと

## 路郎先生染筆

路郎先生筆、掛軸、横額小物、短冊を川柳家に限り左の通りで頒布致します

軸箱入 貳拾圓・額 貳拾圓  
 小物 五圓・短冊 參圓  
 御申込は前金で發行所へ

## 投句用箋

川柳雜誌投句用箋の昭和十一年度新製が出来ました。投句には本社正規の此用箋を御使用下さい。

五十枚綴 二冊 金十二銭

(送料共)

御申込は川柳雜誌社へ

切手代用も可

## 残本分譲

川柳雜誌の残本が少數宛ありますので、左の通りで分譲申上ます

第二巻より第三巻迄 一冊 十五銭  
 第四巻より第十一巻迄 一冊 十銭  
 第十二巻 (送料一冊一銭)  
 御申込は前金で川柳雜誌社へ

## 合本特賣

川柳雜誌の合本第二巻より第十巻まで  
 各一卷 金壹圓五十銭  
 第十一巻及第十二巻 金參圓  
 送料大阪市内 一冊六銭  
 市外 一冊廿四銭  
 御申込は前金で川柳雜誌社へ

## 後の葉柳を頒つ

大正八年に出してゐた「後の葉柳」の残本が僅かばかり出て来たのでお頒ちします。日車、牛文錢、路郎の三氏の句しか載つてゐない樹形四頁もの全三部で十銭、二錢切五枚お送り下さつてもよろし。

川柳雜誌社宛

## 懸賞川柳

課題「算 筈」九月十日  
 用紙は官製ハガキ(化粧柳壇と明記の事) 選者麻生路郎氏  
 秀逸數句に薄謝を呈す  
 宛先 大阪市西成區玉出本通三ノ三六 麻生路郎氏方  
 化粧新聞社柳壇へ

## 轉居

大阪市西成區北吉田町一三番地  
 小川 百 雷

## 轉居

東京市芝區南佐久間町一丁目五二  
 高須 亞三 味

川柳を作る人、愛好する人の必讀誌

## 川柳俱樂部

毎月一日發行  
 一部廿錢・送料一錢  
 東京市牛込區拂方町一四  
 川柳俱樂部社

川上三太郎主宰  
 (毎月一回發行)

## 川柳研究

異色ある本誌の創作欄と初心者への入門欄をアナタは絶對に見逃してはいけません  
 見本希望者は二錢切手十枚同封左記へ  
 東京市王子區上十條町八五〇  
 發行所 川柳研究社

## 川柳きやり

菊判每號七十數頁  
 毎月一日發行一部廿五錢  
 東京市豊島區高田本町二ノ一四六八  
 川柳きやり吟社  
 (取次所) 川柳雜誌社

# 川柳人協會 にお入り下さい

川柳人協會はホントの川柳を社會に広く知らせるためと、川柳の愛好者がお互ひに仲よく手を繋ぐために生れた横の運動をするのが目的です。従つて協會の總會は全國各地で次ぎ／＼に開會され、斯界の大家が出席して講演や句作によつて向上發展を期する一方、相互の親睦を圖る機會を作りたいと思つて居ります。川柳人協會が主體となり各地吟社の共同後援で大會なども開きたいと存じます。

會員は毎月「川柳雜誌」といふ柳誌を配布される外、諸會合に際しては會の性質により入場料の割引又は免除、其他いろ／＼の特典を受ける権利を持つてをります。入會は誰でも何時からでも出来ます。申込書に會費一ケ年分三圓、半ケ年分一圓六十錢を添えて協會へお送り下されば正會員章をお届け致します。送金は振替（大阪三一五一四）を利用して下されば一番安全ですが、小爲替か郵券（二錢以下）でも結構です。御友人にもおすすめ下さい  
大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地

## 川柳人協會

電話 天下茶屋 二五七九番  
振替 大阪三一五一四番  
理事 長 麻 生 路 郎

◇今までに「川柳雜誌」を月極又は半ケ年極で購讀してゐられる方で入會を希望される方は更に一ケ年又は半ケ年分の協會費を前納されれば、殘存誌代の月數だけ延長して正會員章を送り其の月から正會員の資格が出来ます。

切 取 線

## 川柳人協會入會申込書

市 區 町 丁目 番地

雅號 職業

住所 氏名 會費

年分前納の上入會申込みます

# 清 酒

## 白鶴禮讚

白鶴が縁とはなりぬ君と僕  
 よろこびに添へて白鶴届けとき  
 白鶴の方に幹事は極めちまひ  
 母親も白鶴ならと一つ受け  
 白鶴をいつもさらさらぬくらしむさ

攝津灘

あつさを忘れて

冷酒の  
白鶴

洋酒を棄て、

國産の  
白鶴

嘉納合名會社釀

# 祝川柳人協會創立

## 川柳人協會名譽會員

(ABC順)

和 田 天 民 子	楮 元 紋 太	大 島 濟 明	岡 田 三 面 子	村 田 周 魚	森 雞 牛 子	前 田 五 健	食 滿 南 北	龜 井 晟 修	堀 口 塊 人	藤 本 福 造	蛭 子 省 二
安 川 久 流 美	塚 越 正 光	坂 井 久 良 伎	大 谷 五 花 村	中 島 紫 痴 郎	森 東 魚	前 田 雀 郎	小 林 不 浪 人	川 上 三 太 郎	池 田 可 宵	本 田 溪 花 坊	榎 田 珍 竹 林

米本貴志子

小寺鳩甫

谷脇素文

# 祝川柳人協會創立

宮内耕朗  
臺中市榮町一ノ二

在間小樓  
愛媛縣越智郡  
四坂島日暮亭内

石田沐天  
大阪市西淀川區  
海老江上三ノ五七

酒井大樓  
松山市松前町二

石崎柳石

今治市城山通り

須崎豆秋  
大阪市住吉區旭町二丁目

前田五健  
松山市眞砂町

喜多春秋  
神戸市兵庫區  
三川口町三丁目一〇八

淺田一  
東京市世田谷區代田  
一丁目六三五ノ一

西田艸樂  
昭和大阪市東區元伊勢町

川柳雜誌社  
梅田支部  
同人一同

各種旗  
七寶徽章  
メダル  
カツブ

川柳雜誌社指指定

大阪上六  
加藤旗徽章店

殘 暑 御 伺

閣守天 越三・阪大

井濱細小小和數神中永  
井口岡川比田原山谷山  
口壽東々七蛙  
郎步武光行子限山山路  
上栗小寺雨眞阪佐平須  
田原西尾坪田本野野野  
朴空落進山九道蹇不  
堂栗丁兒水緒樂凡人行  
內

阪大川柳會

大阪帝國大學醫學部內

番傘川柳社

大阪市北區堂島北町十六番地  
振替大阪七六九四四番

「番傘」

菊版百餘頁  
定價 金二十錢

雜川誌社柳御池橋支部

西 後 村  
い 藤 松  
わ 青 夢  
を 兒 裡

≡ 伺 御 暑 殘 ≡

池澤樂居

大阪府高石町北六二六

長崎柳秀

大阪帝國大學醫學部

住田亂耽

兵庫縣武庫郡魚崎町五九八二  
電御影二八五七

橋本綠雨  
橋本美奈子

大阪市住吉區平野  
西之町八三

福田山雨棲

勤務 東京鐵道省工務局人事  
住所 積濱市保土ヶ谷三三三

西田艸樂

昭 大阪市東區元伊勢町  
和 園

富士野鞍馬

六 東京市杉地區高圓寺  
丁 目 六八五

岩崎柳路  
岩崎松代

滿洲帝國熱河省凌源南大街  
カフエーモダン

山本丹路

大阪市住吉區帝塚山  
中二ノ三三八  
電話櫻川五二四五番

永田里十九

カナメ食堂  
大阪市南區疊屋町六番地  
電南七五五一

竹内機見女

川柳雜誌社  
大阪市西成區岸松通リ  
二ノ二二孔子園

生田翠夢

川柳雜誌社御旅吟社  
大阪市東區粉川町一六  
電東七五一一五

# 殘 暑 御 伺

川柳雜誌社  
兵庫支部 岬柳社

須崎豆秋  
大阪住吉區旭町三  
電話天王寺一〇一五

淺田一  
東京市世田谷區代田  
一丁目六三五ノ一一

喜多春秋  
神戸市兵庫區  
三川口町三丁目

チトお運び下さり

キング喫茶室

大阪市西成區玉出本通三

濱田久米雄  
神戸市林田區和  
田宮通七ノ三三

吉田水車  
名古屋市東區南大津町  
共濟ビル山武商會

金泉萬樂  
尼崎市東櫻木町四二

町田承春  
愛媛縣伊豫郡中山町  
藝備銀行中山出張所

在間小樓  
愛媛縣越智郡  
四坂島日暮亭内

市場食子  
大阪市東成區  
大今里町三九五

前田五健  
松山市眞砂町二一

石田沐天  
大阪市西淀川區  
海老江上三ノ五七

川柳雜誌社 今治支部

今治市寺町 渡邊  
同 神明町 長野  
同 米屋町 谷心  
同 伊豫貯蓄 月原

高橋かほる  
大阪市南區北炭屋町  
二〇一電話五九六番

森立名  
大阪府吹田町一三五〇

毛利九波  
兵庫縣武庫郡精道村  
打出字郷の本二一  
(吉出正方)

水谷鮎美  
兵庫縣武庫郡大庄村  
西字口開一八一

邊野 曉童  
野文 庫  
心文 府  
宵明

殘 暑 御 伺

川 柳 雜 誌 社  
梅 田 支 部

大阪市住吉區喜連町二一九六

天 野 卜 居

大阪市此花區上福島北三丁目一二二

都 藤 古 木

大阪市西淀川區姫島町五二二

横 田 方 眠

大阪市西淀川區大和田町四四九

中 辻 冬 扇

大阪市西淀川區大和町二九一

松 枝 靜 波

尼崎市小田村今福字藩上六六ノ五

増 元 翠 陽

尼崎市杭瀬宮ノ前二一

山 下 秀 峰

尼崎市杭瀬高田四

神 田 美 津 生

尼崎市難波新町一丁目一一二

川 村 觀 月

尼崎市難波南通四丁目九五

酒 井 斗 風

尼崎市東難波昭和南通五難波園内

薦 野 雨 聲

兵庫縣武庫郡大庄村崇徳院三四九

林 朔 風

兵庫縣武庫郡大庄村西字口開六一

水 谷 鮎 美

兵庫縣武庫郡大庄村西三四四ノ一

辻 遊 步

西宮市今津町字綱引一八

宮 脇 大 嶽

西宮市今津町巖一六九九

前 川 正 風

兵庫縣武庫郡精道村打出東ノ口二ノ一

田 邊 由 布

● 新 騰 寫 印 刷 引 受 ●

▲新しい時代の感觸を多分に盛つた新騰寫美術印刷の御利用をお待ちいたします。

▲同人雜誌、趣味の會報、郷土誌、報告書規約、案内狀、各種カタログ、廣告美術印刷等、如何なるものでも御用命に應じます。最少五六十の印刷から數千、最高記録は一萬三千枚を同一原紙で刷りました。

▲普通菊判誌のものなれば三百部印刷、十頁のもので一冊當り三錢餘りで出来上ります。詳細については御照會願ひ上げます。

大阪市西成區東粉濱電停前

一輪草舎工房

振替大阪12612番

川柳  
句集

# 街の雑者

不朽洞版

★ 作家生活十三年、黙々として吐き出した著者そのままの生き  
た姿、一讀再讀人生の底邊に觸るゝものあらん。敢て薦む。

橋本綠雨著

麻生路郎先生序

定價五〇錢 送料四錢

不朽洞

大阪西成區玉出本通三  
振替口座大阪三〇三二九

發行所

# 無敵の社會・無敵の保險

日本生命の基礎は牢固として抜くべからざるものがあります。日本生命の業績は燦々として他の追隨を許さぬものがあります。日本生命の保險は約款寛大、保険料低廉、配當豊富の理想的生命保險です。正に無敵の會社です。蓋し無敵の保險です。

# 日本生命

大阪東區今橋四丁目

# ルービヒサア ブルジョアニユ

特製



宮内省御用定  
大日本麥酒株式會社

● 劑ンモルホ性男の準標 ●

本品は在來の臟器製劑等とは異り、世界最初の化學合成に依つて得たる純粹男性ホルモン結晶を主成分とし、注射液は毎筒必ず一鹿（二〇鷄冠單位）内服用錠劑は每錠〇・一二鹿（二・四鷄冠單位）の純粹結晶を含有し力價恒に一定、奏効全く確實、副作用絶無なる標準男性ホルモン劑なり。

若返

更年障碍

頭痛・倦怠・精力減退・記憶力減退・視聽活力減退・生殖腺退

性的神經衰弱

勃起力減退・早洩・性慾欠乏・神經衰弱及神經衰弱病

一般衰老現象

動脈硬化・血壓亢進・肥胖病

ホル



裝	包
注射液	5管・10管
錠劑（內服用）	三錠 三八〇
	一〇錠 一・〇〇
	二〇錠 二・〇〇

製造所 嘉寶化學研究所  
 發賣所 嘉寶物產株式會社藥部  
 本店 大阪西區阿波堀通一丁目十番地  
 支店 大阪七五七番八番  
 支店 東京京橋區銀座三西藥正宗ルビ

モ

!

ン

● 用服内 ●  
 ● 用射注 ●  
 呈贈献文



大阪朝日新聞

新聞は朝日  
廣告は朝日

本紙定價  
月金壹圓  
朝夕刊共  
十四頁

週刊朝日 (週刊)

アサヒスポーツ (月刊)

コドモアサヒ (月刊)

大阪朝日縮刷版 (月刊)

アサヒグラフ (週刊)

映畫と演藝 (月刊)

婦人 (月刊)

アサヒカメラ (月刊)

「アラツ、貴方の……にきびが」

「にきびが、どうかしたかい？」

「影をひそめちやつたのネ」

「ウフ」

「變な笑ひ方ネ。妾のあなたをお見そ

れしかけたわ」

「テヘツ有難い。コレのお蔭さ」とボケ

ツトから取り出したのが有名な

にきびとり美顔水！

# 美顔水



△ニキビ吹出物に

一等の良薬！

ニキビ吹出物にこれ程よく効く薬はない  
と言はれ、種々な方では失望された  
方でもこの薬の効能には満足されます。

▲美容薬としても

この薬はまた、美容薬  
としても特に優れた効  
果があり男子方にも婦  
人方にも盛んに服用せ  
られてゐます。

本舗株式会社桃谷順天閣

大正十三年三月三日... 川 卯 雜 志 (第 五 一 號) 定 價 金 參 合 錢